

ルーザ. ヒュッテ ノオト
lusa hutte note



ルーザ.ヒュッテ ノオト
lusa hutte note

もくじ

はじめに	… 03
2003年	… 04
2004年	… 06
2005年	… 06
2006年	… 08
2007年	… 08
2008年	… 10
2009年	… 12
2010年	… 14
2011年	… 18
2012年	… 28
2013年	… 32
2014年	… 46
参考図書	… 50
ルーザ・ヒュッテ案内	… 52
あとがき	… 53

はじめに

ブナの原生林の荘厳な道だとか、清澄な水の流れたとか高山植物咲き乱れる稜線のお花畑だとか、山はいいものです。それら美しいモノたちに出会えるなら少々の喉の渇きや筋肉の痛みは我慢の範囲です。筆者は、山が好きです。特に、花咲き競う夏の、東北の山が好きです。

山行きには山小屋(避難小屋)をよく利用します。荷物の軽減が行動をより自由にしてくれることありますが、山小屋それ自体の、素朴で、簡素なたたずまいがいいのです。

小屋での暮らしは質素そのもの。湯を沸かしてコーヒーを飲んだり、簡単に調理して食べたり、灯りを点したり、寝たりが基本です。そこにあるのは必要最小限のものばかりで、下界のように欲求を即座に満たすような便利なものはありません。けれどもいつもながら豊かな心持ちになるのは、そこに生活の本質が潜んでいるから? そう、生活の本質!...。そんなことを思うと、山小屋(=ヒュッテ)を作ることが筆者の強い憧れになったのです。

そうして構想から10年、材料集めをしたあと、建築に約5年を費やしてようやくヒュッテができました。こんなに時間が経過したのは、筆者が外に勤めを持つ身の、建築には素人だから。休日と細切れの暇をぬっての仕事だったから。

基本はひとりでコツコツですが、一部、素人ではとうてい叶わぬところ、決しておろそかにしてはいけないところはプロに頼みました。

建築について分からないことがあると教本に向かい、それでも理解できないことがあると知り合いの大工に教を請いました。大工の仕事ぶりは好んで見学し観察しました。電気配線は大工や知り合いの電気工事士に教えてもらいながら自分でいい、配線の最後の段階の結線と点検は工事士に願いました(避難小屋に電気など普通はありませんがね。そこは愛嬌)。

材料のほとんどは、明日は焼却か粉碎が運命であったモノたちばかり。道々魅力的なモノが目につくと持ち主を探し、交渉し、よくタダで貰い受けました。床、壁、天井に隙間なく入れた断熱材(発泡スチロール60ミリ厚、グラスウール100ミリ厚)がそう

です。全体に張り巡らした膨大な板材は極めて安価に供給を受けたもの。ガラス窓は学校の解体時に粹ごと自ら取り外して貰ったもの、梁や柱等の主要木材は筆者の実家の古い家屋の解体で出たものも含め解体現場から貰って少しずつストックしたものです。一旦役目を終えたモノでも、工夫し、歪みを整え、削ったり発想を変えたりして新しい生命を吹き込むのはとても気持ちのよいものでした。

そうしてヒュッテはできたのです。

ヒュッテが建つのは東北の植生に典型的なブナ帯、コナラを主とする落葉広葉樹におおわれた美しい森です。ここは豪雪の地ゆえ積雪は平年で200センチにも達しますが、雪が解けるころの光の美しさといったら息を飲むほどです。そして新緑のみずみずしさ、繁茂する緑、紅葉の艶やかさ……、やがて樹木はすべての葉を降らせて束の間の明るい森となり、そしてまた雪がやってきます。人も動物も草木も、すべてはこのサイクルの中にいるのです。

ここでは、冬にはスキーやスノーシューを履いての雪上ハイキング、2月、3月であれば、気候条件さえ整えば堅雪渡りもできましょう。春は山菜採りに野の花散歩、夏は溪流釣りに川遊び、そして秋には紅葉を愛でたりきのこを採ったりもできます。野鳥が多くやってきますのでバードウォッチング、光源が少ないので星空観察にも適しています。

ヒュッテには植物図鑑や山歩きのガイドブック、山や自然に関するエッセーや思想書、写真集や絵本が多数並んでいます。床に身体を横たえて、絵に見入るなり、読書するののも一興でしょう。

またヒュッテにはシードバンク(seed bank=種の銀行)を備えています。筆者は稀少種を含め造形的にも美しい種を蒐集しており、これらは希望があればお分けすることもできます。

ヒュッテは人それぞれの活動に寄りそうことでしよう。

山や自然が好きな方、暮らしの在り様を見つめる方に折にふれ利用していただきたいと思います。

以下に、ヒュッテがどのようにして作られたのかを、資料などにふりかえりながら日誌風に綴ろうと思います。

●
2003年

11月24日【山小屋の構想】【図面】

懸案だった、基礎から自分で作ったカモシカ小屋(車庫。3間×3間)が完成し、造作の一区切りとする。なお、この造作は、戯れで応募したコメリの第1回 DIY コンテストの審査を通り、画像がネット上に公開された。

山を愛する者として登山路に建つ山小屋への思いがふくらみ、建築の構想を練りはじめる。山から戻ったときに休息を取ったり、これから出かけてゆく山を夢見たりする、そういう空間へのあこがれが広がっていた。

新たな建物は、工房と山小屋からなる複合施設というイメージを持った。筆者はかねてからモノ作りをしており主屋内に6畳の作業部屋を持ってはいたが、棚やら作業台やら道具工具やらを置き、その上で作業するにはあまりにも手狭過ぎ、広さの十分な作業スペースを欲していた。それから建物は、来客の宿泊が可能な(いわばゲストハウス)、それはもちろん筆者(たち)の、読んだり書いたり、見たり聴いたりする憩いの空間でもある。そのふたつを同時に叶えようとした。

建築は、和小屋と日本の大工への敬意から木造軸組在来工法を想定した。樹木への憧れから、外装、内装とも一部合板張りを除き、総桧板張りを構想した。

建坪は、3間×3.5間で10.5坪=21畳(工房部が9畳、山小屋部は12畳)とした。平屋でこれぐらいの広さの建物が現在の自分のないうる範囲という自覚があったことだった。

建物の屋根を3寸勾配(中心より水平に10進み、垂直に3上る)としたが、この勾配への憧れは以前から持ち続けてきた。前作の車庫も、前々作のツバメ小屋(コンテナ小屋)も3寸勾配であった。この勾配の美しさには雪が積もっても自然に落下し、屋根に上っても作業の安全性が確保されるということも十分に含んでいる。

構想段階からして工房部および山小屋部とも、採暖には主屋同様薪ストーブにこだわった。

薪ストーブの燃料となる薪はまず、工夫次第で出費がない。貰えばいいし、拾えばいい。クリ園やリ

ング園は狙い目で、雪が多かった年の春には雪折れの太い枝が大量に出てくる。それを持ち主に交渉すれば、引き取りはたいがいありがたいがられるものである。また、大風による公園樹の倒木や行政による川原の伐採木の情報は貴重であるし、知り合いを頼れば薪材の情報は自然に集まってくる。それらを軽トラで随時運び、チェーンソーと斧で汗して働けば捨てられて朽ちてしまうか焼却の運命にある樹木が燃料としての役目を持つことになる。

また、燃料としての薪は大気中のCO₂を固着したものであるの、燃やしてCO₂を放出したとしてもプラスマイナスゼロという計算になり、地球の温暖化に与^{くみ}しない。「地球にやさしい」というお題目は、ずいぶんと流布しているけれども、負荷に与^{くみ}しないことが地球に対してもっとも謙虚なことなのであり、そういう意味でも筆者の心は穏やかだ。

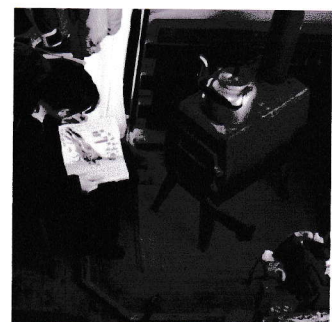
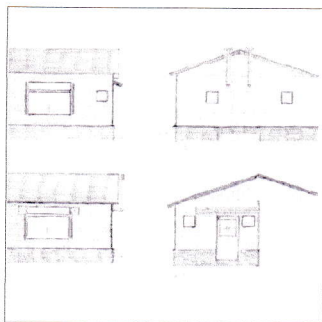
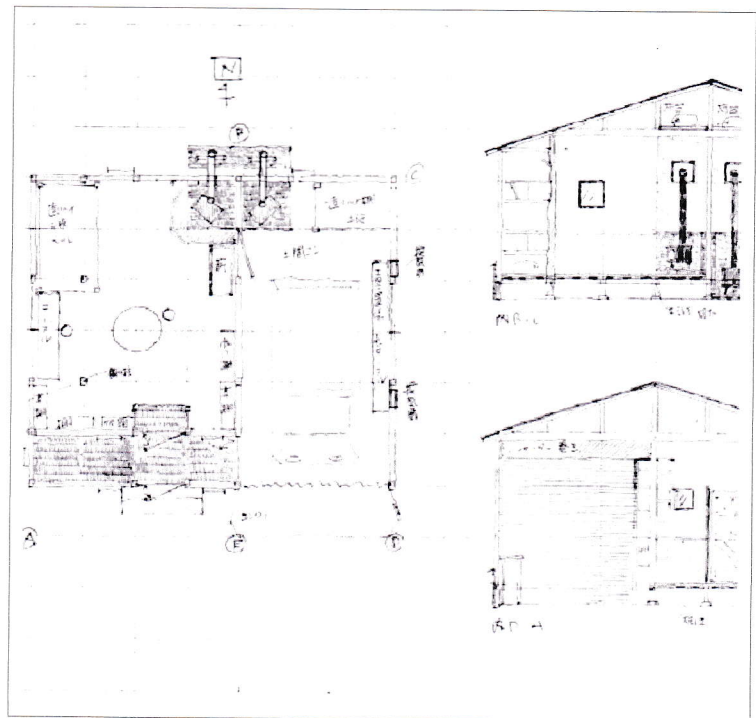
そして薪ストーブの魅力は何より、火が家屋の中にあるということに尽きる。火は原初の人間が手にし、今日まで脈々と受け継がれたものにほかならず、いわばそれは人間が己の遥かな来歴を感じることでできる数少ない尊いものとも言えるだろう。

燃えて薪のはぜる音、炎の揺らぎ、ジワッと伝わってくる熱……、これらは人生の、完璧と言える喜びそのものであることを筆者は疑わない。

薪ストーブへの愛着は尽きることがない。

当時より山小屋部には書架とデスクと棚の設置を想定していたが、この構想は完成まで変わることはなかった。客用にと2段ベッドの設置を思い描いていたが利用頻度の割にスペースを取りすぎることが懸念されて、これについては建築に着手するころには変更して取りやめた。工房部にクルマの図があるが、道具や用具、作業台などをきれいに片づけ、冬季には車庫代わりに使用できまいかと考えていたものだが、現実、それは無理な相談だった。

冬の間、外観や間取りなどの構想メモを書きつけ、図面を何枚となく引いた。



●
2004年

4月11日【石垣】

建築予定の場所は若干の傾斜があり、水平をとるために土留用の石垣を築こうとする。使った石は冬季の除雪車によって剥き出しになったものや川原から拾ってきたものである。だが、形も大きさも数も全く不十分で、そんなものをただ積んだだけの土留めでは何らかの力が加われればすぐにでも崩れてしまいそうな代物でしかなかった。業者から買った山土(2立米で約15,000円)で地面を均しはしたが、そこから先は踏み出す気にはなれなかった。

そのうち作業に嫌気がさして放ったらかしにし、やがてその地には草が生え、原野に戻るかのごとくであった。志も見通しも安直に過ぎた。

5月30日【ヒュッテという名】

日記に「ヒュッテ建設予定地」の言葉を記し、この時期、新建造物のシンボリック名称は、ドイツ語で山小屋を意味するヒュッテ(Hütte)になっている。以降この文書も、新建造物全体をヒュッテ、山小屋部は、ヒュッテ部に置き換える。

8月28日【メモリアルサークル】【墓】

母親が死去する。ロータリーと花壇を兼ねたメモリアルサークル(ヨシノサークル)を、レンガと枕木ブロックを積んでこしらえはじめる。この造作の構想は、中心に両親の骨を収め、四季折々の野の花で彩るというものであった。

地区共同墓地に土地を求め、そこに据える墓をデザインし、できるだけ造作に加わる。メインに五輪塔を据え、墓誌は本形とした。そこに出生と死去の、年月日とその地を彫りこんだ。両脇の通路にはホームセンターMから買った約30ミリ厚、約30センチ角のローマ石12枚をモルタル(セメントと砂と水で作る)で張った。アプローチや背面にはキキョウ(桔梗)やリンドウ(竜胆)、ヒメヒオウギスイセン(姫檜扇水仙)、コバギボウシ(小葉擬宝珠)など、いずれも身近にある、野生か野生化したものを植栽した。墓は10月10日に完成にいたる。

以上のようなことから、ヒュッテの建築構想は、遠のいていく。

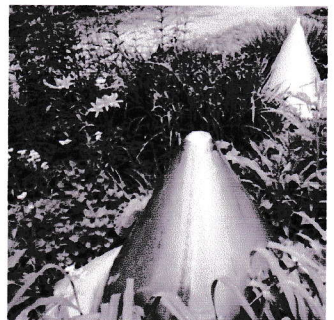
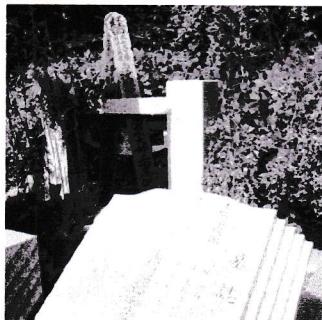
●
2005年

6月17日【納骨】

メモリアルサークルのセンターに、父親(1993年死去)と母親の骨の一部を収める。

そうこうするうち、主宰する宮澤賢治読書会=米澤ポランの廣場の作品展(2006年2月)へ本腰が入り、さらには廣場記念誌の作成がその年末まで続く。

以上のようなことで、ヒュッテの建設はほとんどご無沙汰となる。



●
2006年

2月25日【賢治展】

米沢市の市民ギャラリーを会場に、作品展「展●宮澤賢治へのオマージュ」を開催する。それまでに、コラージュや架空のワインポスターの製作など相当の時間と労力を費やす。

10月3日【評論文】

この日より、長大な評論文「『なめとこ山の熊』ノオト」の執筆にとりかかる。これは翌2007年3月発行の米澤ポランの廣場記念誌VIに発表した。

こうしてヒュッテへの意識は途切れ途切れになって時は過ぎてゆく。

●
2007年

5月1日【実家の解体】

近隣の川西町のS建設工業に依頼し、1992年以来住んでいない南陽市の実家を解体する。

実は実家は新築されたものではなく、家主(茅屋根葺きの職人であった父が仕事場として通っていた屋敷)から安く譲り受けた解体部材で、1967年に建てたものだった。このことは貧乏だった親の、せめて自前の家を持ちたいという切実な気持ちの表れだったと思うが、これは、遅くとも1960年代後半までは解体材でもまだ貨幣的価値はあり単に焼却はしなかったことを物語っているのではなかろうか。

解体にかかる費用をなるべく抑えるため、処理は焼却も含めすべて筆者が行うこととし、梁材、桁材、柱材などの角材は極力使用することを想定する。それでも解体工事には84万円ほどを要した。

なお、解体前に取り払った建具は時代物で、筆者としては使い道が思い当たらず、引き戸約20枚を知り合いの骨董屋(Y.上山市)にプレゼントした。その返礼だったと思うが、今ではとても手に入らない時代物のスキーをいただいて感激した。スキーはのちにヒュッテ内を飾る重要なモチーフとなる。

10月9日【新薪ストーブ】【煙突の設置】

1993年の主屋の新築から設置していた薪ストーブが14年間の使用で壊れた。それは台湾で作られた鋳物製で、デンマークはスキャン社製の名品アンデルセンの模刻のようで、それはそれでスタイリッシュだった。しかし本体の接合が非常に甘く、ストーブシーズンが終わるごとに耐火セメントを詰めねばならない代物で、仕方なく溶接工に願って隙間を鉄溶接してもらって使い継いできたものだった。けれどもストーブ本体にひび割れが生じて限界を悟り、新たなストーブの購入を決めた。

新薪ストーブは様々な会社の様々な製品を実際に見たりカタログを取り寄せたりして比較検討した。そうして思い悩んだあげく、アメリカのパーマントキャスティングス社製のイントレピッドII(クラシックブラック色)と決めた。薪をストーブの上面から投入するトップローディング方式と2次燃焼装置



コラージュ;賢治追遥



があること、それから何より美しいフォームが決め手となった。

新ストーブは山形市の薪ストーブ専門店の Z 屋で、24 万円で購入した(ただし現在、この商品は、当時より 10 万円ほど高くなっている)。その他煙突部材などを含めて総額 35 万円を要した。

煙突の部材は高価だ。シングル煙突 1 ミリ厚直筒管 100 センチは現在 1 万数千円が相場で、これがダブルだとすればその倍ぐらいである。

煙突工事は 8 月よりはじめた。

煙突の固定方法を検討した結果、地上より固定された基礎の上に梯子を立て、煙突を梯子が抱くように構想した。煙突トップまでが地上 9 メートル、梯子の長さは約 6 メートルである。したがって梯子を載せる基礎高が 3 メートルとなり、その嵩上げが必要なら、いっそのことそれはレンガによる燻製小屋にしてしまおうとした。この工事は大がかりなものとなった。

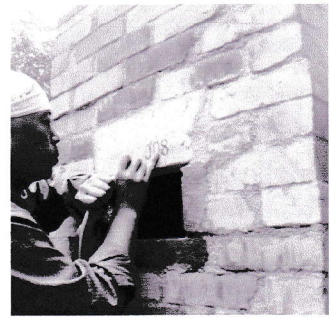
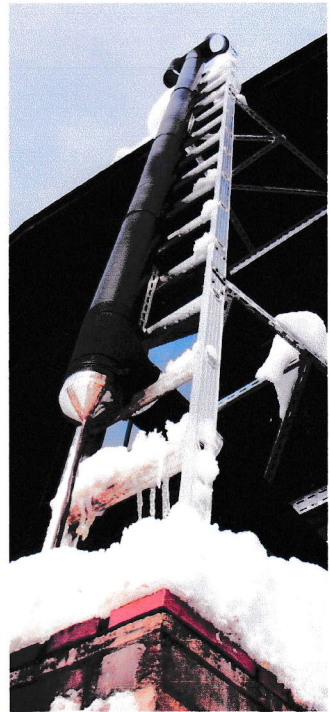
なお、この煙突設置法は強固で、2011 年 3 月 11 日の大地震にも何らの損傷も見られなかった。

●
2008 年

10 月 8 日 【ベタ基礎依頼】

ヒュッテ建築の意を決する。

S 建設工業にベタ基礎打ちを依頼し、来春以降の工事の打ち合わせをする。



●
2009年

6月12日【ベタ基礎打ち】

業者によって、ヒュッテのベタ基礎が打たれる。柱落としの位置に基本ブロック2段の基礎が立ち上げられる。それから、石垣を作るために周囲に捨てコンクリート(捨てコン)が打たれる。

この一連の工事で62万円を要した。この費用にはのちに使用するふんだんな山土と砂利、モルタル用砂も含まれている。

ベタ基礎打ちと基本ブロック基礎の立ち上げを業者に頼ったのは、今後の作業の基準となる水平面の確保と柱の正確な位置決めをしたかったためである。前作の車庫は基礎から自分で工夫して作ったものだが、今はそういう気力も時間もない。これは、すべてを自分で行うという意義より、以後の正確で着実な作業を見通した結果であった。

この工事をもって、ヒュッテの建築が本格的にスタートする。

6月18日【角ノミ機】

憧れの角ノミ機(リョービ社製)が入荷する。ホームセンターM扱いで、95,550円であった。今でならネットオークションを利用して中古を探すところだが、当時は中古品を入手する方法を持たなかった。

6月21日【木取り】【製材】【墨つぼ】

ベタ基礎打ちに感化され、建築スケジュールを見通す。膨大で複雑なスケジュールをひとつずつ崩していかねばと思い、まず、主要部材の木取りをはじめ。大引材、柱材を取る。以降、間柱材等各部材の木取りと製材を行った。

年月を経た角材は振じれたり曲がったりしたものが多く含まれ、歪みの整えは欠かせなかった。歪みの整えには、墨つぼと指矩(曲尺)、電動カンナが活躍した。工具を駆使し一面を整えれば、反対面は自動カンナで仕上げることができる。

墨つぼは今までの小屋(薪小屋、材料小屋)建築にも使ってきた道具のひとつだが、その威力には改めて驚かされる。どんな長尺の材でも、その面が曲がっていようが歪んでいようが直線を引くこと

ができるというのはまったくすばらしい。

その頃、2001年の豪雪で天井が崩落した市内のボウリング場の、天井の仮支えのための角材20本ほどを、担当した会社の方から無料でいただいた。その方の家の不要な物(コンパネ材等)を処理したことへの返礼のようだった。角材はいずれも3寸角2間ものの立派なもので、中にはヒノキも含まれていた。買えば1本2,000円ぐらいはしたのではなかろうか。この材木はその後、建築の主要部材として大いに役立った。

9月5日【石垣】【モルタル】【コンクリート】

土留め用にしっかりとした石垣とすべく、十分に集めた石を捨てコンの上にモルタルで積みはじめ。一つひとつの石をたわしで擦って汚れを落とし、積む際にはどこにどれがふさわしいかを吟味しながらの作業で時間がかかった。石垣を築いたあとは山土を入れ、9月20日で終了する。

この時からセメント(ポルトランドセメント)を使い始めたが、一連のヒュッテ建築では後のストーブの炉台作り(2012年8月)までに20キロ袋(1袋380円)を約25袋消費した。

セメントの空練りと本練りに猫車(深めの一輪車)が大活躍した。

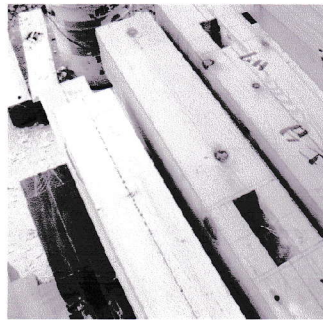
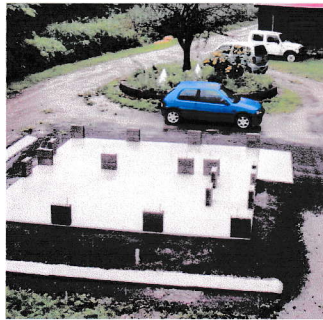
セメントはデリケートなもので、特に空練りに神経を使った。砂の黄土色とセメントの灰色を混ぜ、全体が同じ色になるまでに練り上げるのは根気がいる作業である。さらに、それに水をどの程度加えたらどのような粘度になるのかなど、モルタルやコンクリート(セメントと砂利と水で作る)をうまく作るのには経験を要した。

9月24日【玄関口アプローチ】

ヒュッテ玄関口へのアプローチを、捨てコンの上にモルタルで石を組んで作りはじめる。

地表面から玄関の立ち位置までの高さの差は約50センチあり、それを傾斜上方の右で2つ、下方の左で3つの段をつけてあらわした。段の角には角ばりを持つ石を、平面には平らな面積が広い石をなど、石の適材適所の配置に心がけた。

石積みの作業中、適度な砂利が必要となり、土を掘って篩ふるいにかけてより分け、ていねいに洗って使えるようにもした。



●
2010年

一つひとつ大きさも形状もちがう石をどこにどう使うのかを考えながらの、しかも水準器で高さを割り出しての作業の連続で神経を使い、時間がかった。

アプローチの作業は、10月10日までを要してほぼ終える。

10月11日【レンガによる布基礎】

基本ブロック基礎の間に、敷地内で掘り出したレンガを積んで布基礎を作り始める。この掘り出したレンガというのはかつてここに陶工が住まっていた、立ち去るときに登り窯に使用したものを地中に埋めていったというレンガで、それをこの町内会の元住人で設備屋にお勤めのEさんが近くの仕事の折に寄って下さり、重機を使って片手間で掘っていただいたものである。2002年の6月のことである。このレンガはこれまでに、車庫の布基礎やメモリアルサークルの囲いにと大いに利用してきた。

レンガはストリッパーで糊(レンガ用モルタル)をこそげ落とし、たわしで洗って泥や汚れを落として使えるようにしたが、その数は膨大であった。たわしをずいぶん擦りつぶした。

そうして使えるようにしたレンガを、ブロックとブロックの間に板をFクランプではさんで壁の垂直と天端の水平をとり、そこにレンガ鍔を使ってモルタルを敷いて載せていった。

モルタルは時間とともに変化する生きもので、このレンガ積みは絶えず時間との闘いとなって緊張を強いられた。半乾きの頃合いを見計らって、今度は水を含んだたわしとスポンジで表面を擦ってレンガ表面に付いたモルタルの汚れを落とすのは一苦勞で、これは経験した者でないと共有できない感覚かもしれない。

この作業は年末の11月22日の降雪時まで続いた。

4月17日【布基礎の完成】

雪が解けてようやく外仕事ができるようになり、基本ブロック基礎の間にレンガを積み終え、布基礎が完成する。

5月16日【ストーブ設置位置嵩上げ】

ヒュッテ部のストーブ設置位置を基本ブロックで覆い、ベタ基礎レベルから砂利を詰めてモルタルで固めて嵩を床レベルまで上げる。100キ口ほどもあるストーブを板床に直接載せるのではないので、これならどんなに重量があっても耐えることができる。

一般住宅で薪ストーブを設置する場合でも本当はこういう施工をする必要があるのだと思うが、実際は省いている例がほとんどである。実は我が主屋の薪ストーブの場合もしかり。

7月4日【風除室床】

風除室床を、モルタルでレンガと石を組んで仕上げる。玄関からヒュッテに至る南北のラインはレンガで模様あらわしとし、工房から風除室奥に至る東西のラインは川原石と玉砂利のあらわしとした。平面が広い川原石はそう多くはなく、吟味して使った。

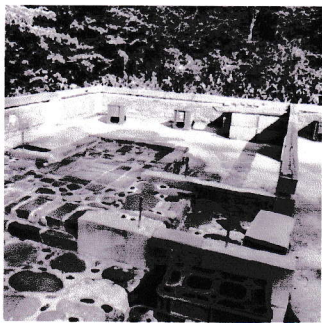
工房と風除室の床レベルの差は25センチほどあり、途中に1段を設けて上りやすくした。

9月の中旬までは、とにかくレンガと石とモルタルによる作業が続いた。

9月19日【鋼材梱包箱】

板材を取るための鋼材梱包箱(鋼材箱。市内のタップ・ダイスを製造する会社がフランスなどから輸入している鋼材を梱包している箱)が届き、解体し釘を抜き、使用可能な板としてストックし始める。4メートル長、10~30センチ幅、15~30ミリ厚の板4面が取れる様々な箱が一箱たったの50円(のちに100円ということになった)で分けてもらえるのはありがたかった。どこにどういう板を使用するのかを想定しながらの作業となった。

何気に通りかかって野晒しにされた木箱の山に



目をとめ、会社と交渉して譲り受けることとなったのは、もうはるか前の 1998 年の夏のことである。話をするうちにその会社に高校時代の同級生がいることが分かり、その後は事がスムーズに進んだ。

聞くところによれば、この 50 円 (のちの 100 円) という値段はその箱の値段 (価値) ではもちろんなく、責任料という意味合いらしかった。会社にすれば引き取ってもらうのは処分料がかからない分ありがたいことだが、かつて希望した人にやった物が山中に放置され、箱に会社名が記してあったことから当社が、行政から不法投棄の注意を受けたことがあったのだという。

一回の注文で約 50 箱が届くので、到着以降しばらくは箱の解体の作業が続く。箱の両端を丸ノコで切り落とし、パールで板と板を分離し、分離した板の釘を逆方向から金槌でたたいてパールで釘を抜く……、抜く釘の数といったら万の単位となる。板は、一回の注文で幅と厚さが様々なものが約 200 枚できることになる。

この材料をはじめて使ったのは 1998 年のクマ小屋 (薪小屋) の造作からで、順次キツネ小屋 (薪小屋。99 年)、リス小屋 (材木ストック小屋。2000 年)、ツバメ小屋 (コンテナ小屋。物置 01 年)、カモシカ小屋 (車庫。03 年) の造作にと必要不可欠なものとなった。

9 月 26 日 【尺杖】【墨つけ】【刻み】【継ぎ手・仕口】

木取りと墨つけの下準備として、材の捩じれや曲がりをよく吟味して尺杖を作る。尺杖はすべての墨つけの基準となり、以後の作業が効率よく合理的に進む。

土台、柱、間柱、桁、棟、梁など家屋の骨組みを構成する主要な部材の墨つけをはじめ。墨つけには墨つぼをはじめ、指矩やスコヤが大活躍した。一本一本、正確で慎重な作業を進めた。

墨つけが済み、刻みをはじめ。

継ぎ手・仕口としては、土台回りでは、“腰掛けあり継ぎ”を多用し、他に“隅大入れあり掛仕口”、“T字大入れあり掛仕口”、“かたぎ大入れ”を用いた。小屋組では、軒桁に小屋梁を載せるところでは“かぶとあり掛仕口”、その他は“大入れあり掛仕口”を多用した。ただ、梁の継ぎ手を本当は“台持

ち継ぎ”にするとところだが、あまりに面倒に思えここは慣れてきた“腰掛けあり継ぎ”で済ませ、継ぎ部分の上下に頑丈な鉄板を渡し、“添え板ボルト継ぎ”として強度を高めた。大工に言わせれば、“腰掛けあり継ぎ”は引っ張りには弱いのだという。

刻みでは角ノミ機が大活躍する。前作の車庫を作る際には、ホゾ穴はすべてドリルで穴をあけ、手ノミで整えていたものだった。手ノミは、作業は正確であるのは確かだがとにかく非効率、一日をかけて3つか4つを作るのがせいぜいだった。それが角ノミ機を使えば、ひとつの穴がものの3分もあればできる。これで大いに時間を稼ぐことができた。角ノミ機はこの日のために買ったのだが、このマシンの威力はすばらしかった。

その年の降雪は11月13日で、それまで続けて、刻みはほぼ終了する。

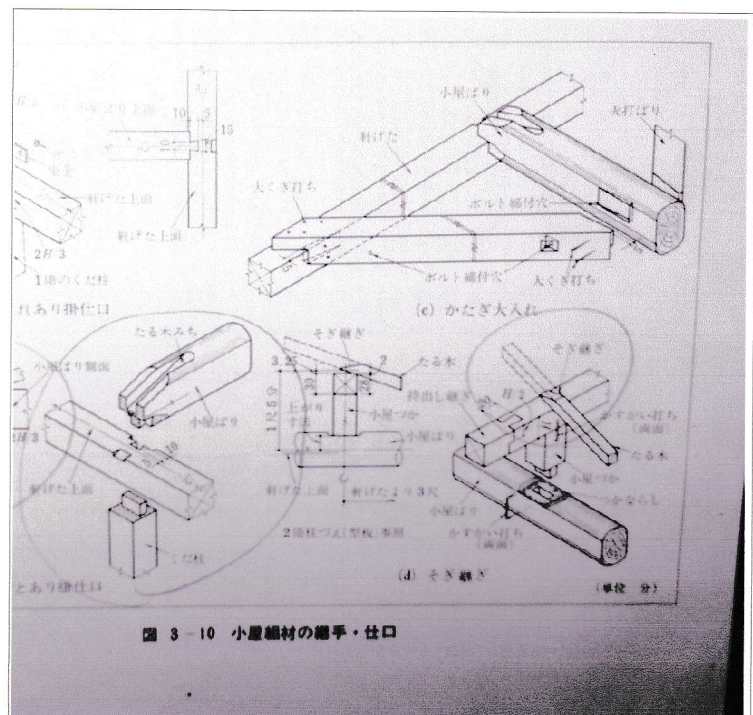
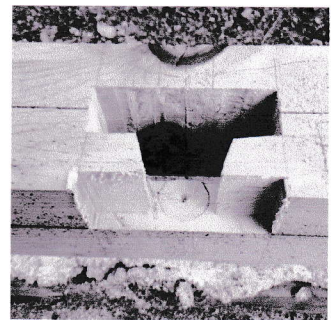
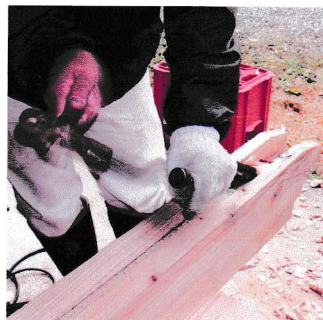
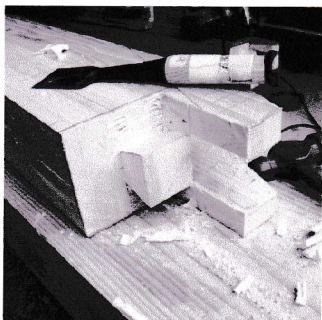


図 3-10 小屋組材の継手・仕口

『木造住宅 建築工事の進め方』山室滋著、市ヶ谷出版1981 より



●
2011年

3月11日【大地震】【車庫の梁の補修】

大地震が発生したこの日、職場から家に戻ってみると、主屋のストーブ周りの積みレンガ(ただ積んだだけのもの)はめちゃくちゃに乱れ、2階の書架の本や資料があちこちに飛び散っていて悲惨な状況だった。

インフラ関係としては、電気は山形県では小国町のほか米沢市だけが止まらなかった。ここで分かったのは、県内で小国と米沢の電気だけは新潟から送られてきており、それ以外の市町村は仙台が供給地だったということ。我が家は、水は伏流水の井戸水(汲み上げには電気を必要とするが、いざとなつて電気が不通なら直接に井戸から、または近くの川から汲み上げることも可能)、ガスはプロパンガス、暖は薪ストーブだし、以後の生活に不自由することは何ひとつなかった。大災害の中に、我が家だけは平常で、ぽっかりと穴が開いているような感覚だった。

ヒュッテの建設地は布基礎が立ち上がっているという状態だったが、大地震の影響はまったくなかった。ただ、建築部材を収納していたカモシカ小屋(車庫)の梁が、“渡り臑”近くの“腰掛けあり継ぎ”の部分で折れが確認された。梁はのちに、補強のための支えの柱を1本追加して補強した。

5月25日【土台回し】【束石】【猫板】

土台とする材に防腐剤(クレオソート)を塗布し、6ケの羽子板付き束石をコンクリートで作って設置し、ベタ基礎の上に渡す。

束石を作る際に使用した器は、勤め先の給食に使われた1号缶と呼ばれる規格品である。筆者宅で1号缶は、蝋燭入れ、小物入れ等容器として様々な場所で活躍する。1号缶は径16センチの市販の蓋でも付けければ立派な容器となる。缶そのものを焼いて黒錆(四酸化三鉄)をつけければ内部からの腐食を防ぐことができ、さらに古色然とする。

土台を基礎に渡す際、基礎と土台の間に、柱の落とし位置にクリ材による猫板(基礎パッキン。10センチ幅×30センチ長×30ミリ厚)をかませる。これは基礎を欠き取って設ける従来の床下換気口に

代わる近年の換気法で、布基礎部分を欠かないことから基礎の強度を損なうことなく十分な床下換気を行おうとする方法である。

土台回しは6月5日に終了する。

6月11日【足場】【上棟】【仮筋交い】【面あらわし柱】

かつて我が主屋を建築した際の棟梁のF大工の援助を得て、柱を立て、梁や桁を渡す……、いわゆる上棟を行う。垂直をとった柱の固定のために四方に仮筋交いが入ってゆく。

材木の持ち上げにはクレーンは使わず、すべて人力で行う。

足場は主に脚立に板を渡すという素朴なもので済みます。屋根の軒が一番低い西面だけは大工が設置した簡易足場が据えられ、しばらくは貸してもらって使った。安全な作業をするために足場の確保は殊に重要である。

この上棟は肝心なもので、基本の柱を、全方位にわたって垂直を正確に出す必要があった。これを素人仕事とすると少なからず狂いが生じ、後々まで構造上に問題が残し、修正も不可能となる。

実家の解体で出た丸太のままの松の梁材の2本は一面のミミを残して3面を整え、ヒュッテ部の面あらわしの柱とした。柱材は主に桁にしたが、それはステイン塗料(浸透性塗料)が塗られたそのままのあらわしなのですぐにそれと分かる。材木としての強度を出すため、ホゾ穴は木材でいねいに埋めた。

6月15日【垂木】

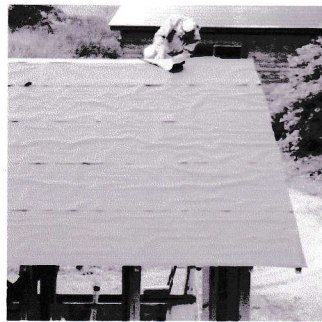
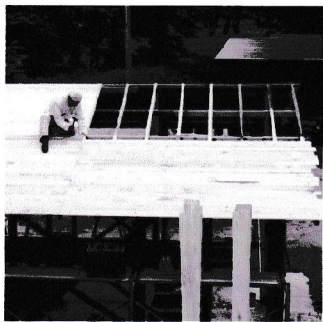
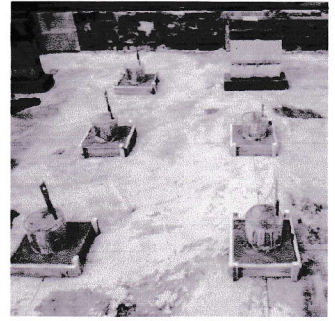
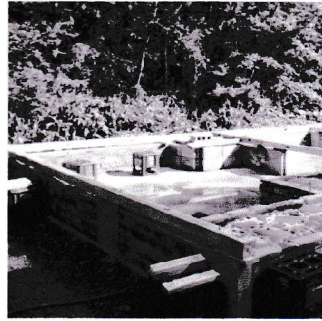
垂木を取りつけはじめる。寸が足りない部材は、“そぎ継ぎ”として継ぎ足した。垂木部材は古材や廃材だけではとうてい間に合わず、30本をホームセンターMから約3万円で購入して充てた。

垂木の打ちつけは“大釘打ち”(両側面斜め打ち)で行い、18日に終了する。

6月19日【野地板張り】【ルーフィング】

鋼材箱が約50、さらに届く。

釘を抜き、同じ規格(15ミリ厚)に製材した大量の板を、野地板として張りはじめる。野地板を張り終え、妻側からはみ出した部分を丸ノコで切り揃



えて、作業は22日に終了する。

最近の住宅建築では野地板を桤板で張るという作業は見当たらなくなっており、合板に取って代わられている。合板は水に弱く、最近の住宅の寿命の短さはここにも表れているように思う。

引き続いて、アスファルトルーフィング(屋根葺き材下の防水材。並製50メートル巻3,400円程度のもの)を軒端から棟にかけて全面に巡らす。しかし最後の棟部分を張るに足らず、地区のS大工に相談すると大工仲間とすぐに連絡を取ってくれ、仲間にストックがあるということですのですぐに駆けつけ、譲ってもらって事なきを得る。

7月8日【屋根鋼板葺き】

F大工に依頼し、トタン(亜鉛鋼板・赤)で屋根を葺いてもらう。大工のご長男が板金工とのことで、屋根葺きのための道具・用具も用立てていただいたの作業だった。屋根の色が赤であるのは、筆者の一貫した美意識である。

請求にしたがって大工へは、上棟と屋根葺きの手間とトタン材料代とで183,000円を支払う。

屋根をトタンで葺いてもらったことによって雨の心配がなくなり、屋根の下での作業が可能になった。雨の日に野外で仕事をする場合はかつて、キャンプで使っていたタープテントを張ってしのいだものだが強い雨風には耐えられるものではなかった。屋根のありがたみをしみじみと感じた。

7月9日【間柱】【本筋交い】

間柱と本筋交いを入れていく。これによって家屋の構造が少しずつ強固になっていくことが実感できる。本筋交いを入れるかわりに仮筋交いを取り払う作業は一種胸のすく思いがした。

本筋交いの接合には、“大入れ欠き込み”を使う。現代の家屋の建築では、この接合も安直に金物に置き換えて作業の効率化を図っているようだが、金物使いよりも材に直接刻みを入れて差し込む方が強固であるのは間違いないだろう。そういう昔ながらの技法を使った。

この作業は25日までを要した。

7月25日【窓枠塗装】【額縁】

2000年夏に解体直前の中学校から貰い受けて

いたガラス窓のアルミの枠を、養生をていねいに施しながら黒のスプレー塗料で塗装する。

翌日から窓枠を入れはじめる。31日までに、3箇所窓枠を設置する。

窓台や窓まぐさの造作、窓枠のはめ込みは前作で2箇所経験済みであり、作業はスムーズに進んだ。

追って、額縁を入れた。額縁の端は45度に切って合わせた。木口を隠すことがひとつの美意識とされてきた日本の造作や建築で、なるほど目につくところに木口は見当たらない。角の45度切りもそのひとつの技法なのだろう、それに倣ってみた。

額縁が入って、窓を入れる下準備が整う。

7月31日【火打ち梁】

火打ち梁4本を、“かたぎ大入れ”で四方の梁と桁に渡す。F大工の助言で、通常の倍の長さ(6尺=182センチ)を取って渡した。渡す長さが長いほど構造は強固になるということには理があると思う。

8月2日【床レベル】【床束】【大引き】

水準器を頼りに床のレベルを定めるが、風除室を除いたヒュッテ部5坪(10畳)の広さの水準を取るむずかしさをつくづく感じた。何度も何度もやり直した。本当は、正確な墨を付けたくて3,000円ほどの簡易なレーザーレベルを買って使ってみたが、光の加減かどうも光線の位置が把握できず役に立てることはできなかった。

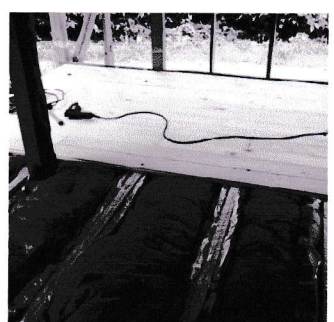
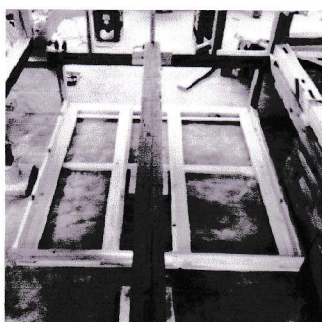
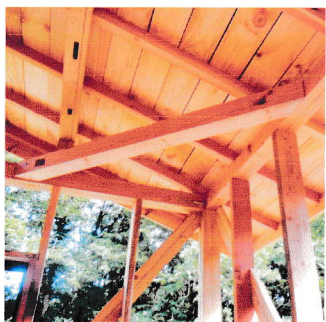
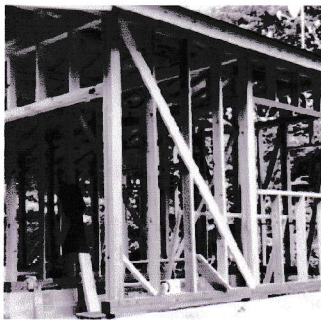
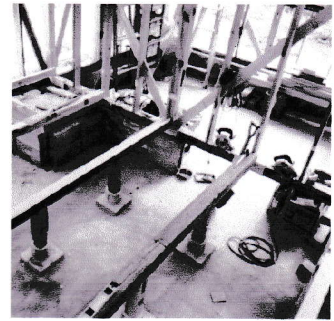
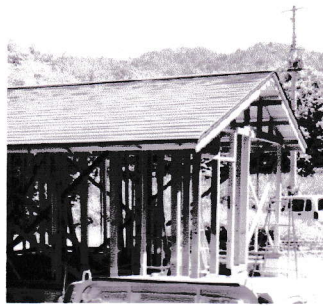
置いた束石に床束を立て、大引きを渡して床の土台ができる。

8月4日【床下収納】

ヒュッテの床下の有効利用として、塗料等の収納スペースを確保する。そこに2台の荷車を滑らせるためのレールに当たる下地材を設置する。

8月5日【床断熱】【溝切りカッター】【床張り】

床に断熱材を入れるために、5ミリ厚のベニヤ板(選挙ポスターの板)を大引きの上に敷き、45ミリ角材の根太を渡す。そこに農業用ポリシートを敷き、グラスウールの断熱材を隙間なく入れる。現代の建築ではこの部分を安直にする傾向があり、断熱



材を省いて、大引きに一気に 24 ミリほどの厚い合板を張ってフローリングの下地として済ましてもらうようだ。

断熱材を入れた上に相欠きした 22 ミリ厚の板材を張り巡らす。この 22 ミリ厚板材というのは一般建築ではとても考えられないほどの贅沢だろう。鋼材箱にはこの程度の厚みを持った板も相当数含まれており、板厚によってより分け、数年にわたってストックしていたものを使った。

相欠きは溝切りカッター(仕上げ溝切り。日立工機社製)で行った。この溝切りカッターは前作の車庫作りから導入したものだが、大量の部材を相欠きするのに大いに威力を発揮した。溝切りカッターはかなり高価な買い物で(ホームセンターM 扱い。10 万円くらいだったと思う)、今だったらネットオークションで中古品を安価に入手できるとすると少々悔しい。

12 日に床張りが完成する。床の完成はひとつの大きな区切りと思い、ビールで祝杯を上げる。

床張りを振り返ってみると、一枚の板のタテの歪みが修正しきれていないものもあり(それでも十分に気を配って修正したつもりだったのだが)、さらに打ちつけの際の板の追い込みが甘く、しかもヒュッテが出来上がってからの薪ストーブによる乾燥が加わって、目地あらわしのように隙間が空いてしまったものだった。隙間が空いたというのはそこにゴミやホコリがたまるということであり、定期的な吸引による掃除が必要となった。その対処にはパテ等による目地埋めも検討してみたが、費用対効果や見栄えなどからして、その後も躊躇しつづけた。

8 月 13 日【水切り】

土台に水切り下地材の角材を周囲に渡す。購入したサブロク判のトタン板(約 1,000 円×2 枚)を切って曲げて水切りを作り、角材に打ちつける。

水切りは今やホームセンターで市販されてもいるが、ちょっと工夫すればまったくの安価でできることを知る。要は、トタンハサミが一丁あれば済む話である。

油性塗料の色を調整して、赤錆色を作って、水切りに塗る。

8 月 16 日【電気配線】【換気扇】【蛍光灯】

電気を通すため、電線を主屋の外付けコンセントから引く。電線は水道管として使われるポリエチレン管(通称「黒ポリ」)の中に入れ、地下に埋設する方法をとった。電柱を立てて引く案も検討したが、分けても費用の関係で埋設に落ち着いた。黒ポリは不要物として 2000 年頃に職場からもらっていたもので、もらったはいいもののそれまでに活用の機会はなく、ここでようやく日の目を見た。

筆者が出向している職場の電気工事士の Y さんと F 大工の教えにしたがって電線の配線をしはじめる。30 日に、工事士に配線を点検してもらい(一部は張り直してもらい)、最後に結線をしていただいた。

工房部に換気扇と蛍光灯を取り付ける。換気扇は主屋内の作業部屋で使用していたものを取り外して転用し、蛍光灯は一番安い直筒管のものを 2 セット購入した。1 セットで 2,400 円くらいだったと思う。電灯(蛍光灯)が点るうれしさを覚える。これで、夜間も心おきなく仕事ができる。

工房部のコンセント口は 2 箇所、西に二口、東は様々な電動工具が据えつけられているので三口をつけた。風除室には灯り採りに 1 箇所二口、ヒュッテ部には 2 箇所、西に三口、東に二口をつけた。

コンセントプレートはすべて使用済みの、貰いものの金属製のものを使った。

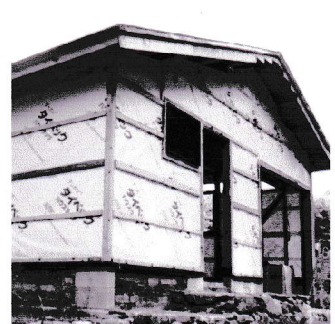
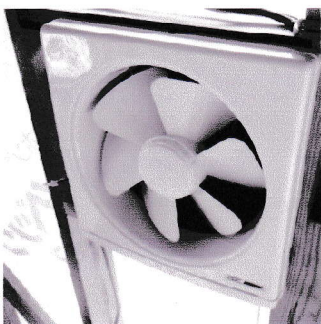
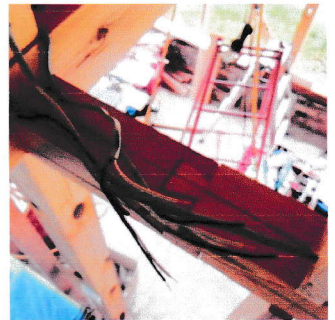
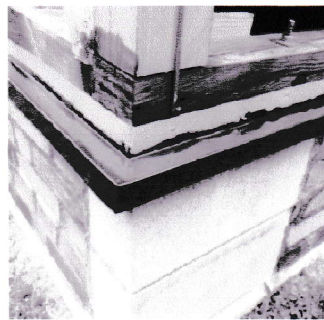
8 月 25 日【防水透湿材】

防水透湿材(デュポン社製タイベック)を外壁下地全面に張る。高気密高断熱であるがゆえに寿命が短いとされる現代の家屋(家自体が呼吸困難に陥るのだから短命なのは当然だろう)で、かろうじて耐久性を保持しているのはこの素材によるところが大きいと思う。

防水透湿材は 1 巻 50 メートル 5,000 円と値は張ったが、肝要な部材と考えて購入した。しかし、壁面全面を覆うには少々足らず、とはいえさらに 1 巻を買う気にはなれず、結局足らない部分は、農業用ポリシートで代用した。

9 月 3 日【薪ストーブ】

ヒュッテ部に設置する薪ストーブをホームセンターMより取り寄せで、69,800 円で購入する。新潟のホンマ製作所のデザインで、中国で作られた



MS-310TX という名の重量約 90 キロのもの。フォルムが美しく存在感がある。耐久性に疑問が残るが、格安だと思う。

9月11日【メガネ石取りつけやり直し】

ヒュッテ部の煙突を通すためのメガネ石の位置が不適切だったことに気づいてやり直す。壁からの距離があまりに近すぎて、ストーブの設置そのものができなくなるところだった。

9月18日【工房部内壁面(西)張り】

工房部の内壁面(西)を構造用合板で張り上げるこの材料は、端材ゆえに業者が捨てていたもので、断ってタダでいただいていた。が、どうしてどうして、多少モザイク様でも立派な壁面ができた。

面積分合板代、約1万円が浮いた。

10月9日【自動カンナ】【タテ張り】【換気口】

外壁面を板で覆うために、解体した鋼材箱を同規格(18ミリ厚、160ミリ幅)に製材する。これまでも製材をくりかえしてきたが、自動カンナ(マキタ社製312ミリ)はその度に威力を発揮してきた。このマシンは2001年の8月、つまり車庫を作るところから加わったのだが、これなくしてヒュッテの建築はありえなかった。

実は鋼材箱の難点は、使われている釘がスクリューで、途中で2本の微細な針金がかっついている特殊なものになっている点にある。それは打ち込むことによって板同士をより強固に接合するためになされているようだが、釘を抜くと、その微細な針金が残ってしまうことがままあるのである。表面に見えるものはひとつひとつラジオペンチでつまんで抜いたが、抜き切れるものではなかった。そういう板を製材するということは残った微細な針金がかんナの刃を少しずつ傷めてしまうリスクを負っていた。それで、シーズンに一回は刃を研ぎに出した。刃研ぎは1枚で800円、刃は2枚、計1,600円。自動カンナの維持にはこのような保全費もかかっている。

外壁を張り始める前に、防水透湿材の上に、ヨコ合わせ胴縁を約45センチ間隔で打ちつけた。ここで注意を要するのは、防水透湿材と外壁の間に胴縁によって隙間をこさえ、空気を逃がす道をつ

けてやることである。そうすることによって断熱や除熱効果が期待されるという。胴縁そのものへも穴を開けて空気の通り道を確認したが、たぶんそれは近々ツチバチ(土蜂)によって泥で埋められてしまうだろう。ツチバチは抜け目がない。

胴縁で下地を整え、外壁をタテ張りに打ちつけはじめる。まず玄関のある正面の南面を張り、次に北面に進んだ。さらに西、東と作業を進めた。順序を南、西、北、東としなかったのは、途中、同規格の材料が切れてしまうことを恐れたからである。案の定、南面と北面が済み、西面と東面を張っている途中で160ミリ幅の板は底が付き、それ以降はやや幅狭(130ミリ幅)のものをあり合わせで作って、急場をしのいた。

南北外壁面に既製品の軒下換気口(380円)を2個ずつ、東西外壁面には100円ショップの調理具の落とし蓋を工夫して作った換気口を2ケずつ取りつけた。

10月14日【シャッター】

南陽市赤湯の建設資材販売のY商店を通して依頼したシャッター(三和シャッター社製)が、米沢市川井のM工商によって工房口(1.5間)に取り付けられる。シャッターは前作の車庫同様、内巻きで黒塗装のものを希望した。請求は89,000円だった。他の業者にも話を聞いて比較してみたが、この請求は安いと思う。

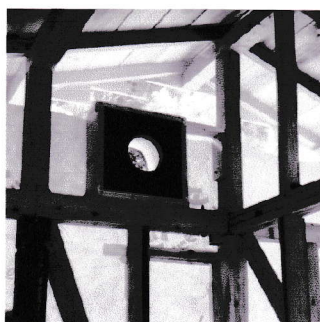
工房部口の開閉は木の扉も考えはしたが、今後家具等大物の出し入れが予想され、シャッターでよかったのだと思う。

10月29日【ハンマードリル】

電気工事士のYさんが救援に入ってください、基礎の上部から出ていた電気の引き込み管を基礎の下部分から出すよう、ハンマードリルを使ってレンガ壁に穴を開けていただく。これで、一部不自然な外周りがすっきりした。

10月30日【ガラス窓】

地区の設備屋のS加工から購入した引き窓2セット(工房部北、ヒュッテ部南、1セット12,500円)を入れる。基本は貰いもので済ますが、適当なもの底をついて新規に購入することとした。工



房とヒュッテの風通しには是非、ほしいものだった。

すではめ込んでいた窓枠に、アルミ部に黒塗装を施したガラス窓を3箇所に入れる。

アルミサッシ窓は、素地の灰色がどれほど建物を味気ないものになっていることかと筆者は常々思ってきた。本当は、窓は木枠で、ペアガラスや2重サッシがよいと思うが、それは財布との相談である。アルミ部の黒塗装は、見栄えと機能と予算の妥協の産物と言える。

窓枠にガラス窓が入ると、殊にうれしくなる。かつて家族で一緒に読んでいたローラ=インガルス=ワイルダー(1867-1957)の『インガルス一家物語』3の『プラム・クリークの土手で』にあった、家にはじめてガラス窓が入ったときの家族の喜びの場面が思い出された。

ガラス窓の出現は、家に居ながらにして外を眺めることができ、しかも開閉によって風量も温度も調整することができる、人類の家屋史上で最も革命的な出来事のひとつだったと思われる。

11月8日【薪ストーブ】【煙突セット】

工房部の薪ストーブとふたつのストーブの煙突セットが届く。

薪ストーブはネットオークションにて37,500円で落札して入手したものである。ストーブはマッチ箱のようなフォルムが妙に新鮮だった。これで、工房での作業で出る使いようのない端材やオガ屑などを燃料に、暖を採って製作に励むことができる。

煙突も同時にオークションで落札した。106ミリ径(工房部)および150ミリ径(ヒュッテ部)の煙突セット(メガネ石やメガネ石覆いの鉄板も付属)が53,420円という、常識では考えられない安さだった。ただし、板厚は薄く、造作はいずれもハゼ折である。

以上のオークションは知人に代行してもらったものである。今はちがうが、当時のYオークションは5,000円以上の落札には会員として会費を納める必要があったが、筆者は会員ではなかった。

11月12日【ブレイカー】

電気を引いた外づけコンセントは電気工事士のYさんによってブレイカーに作り換えてもらう。当初、筆者にはこういう発想はなく、さすがはプロと思っ

た。これによって、工房部での超過消費電力にブレイカーがかかる。このブレイカーには、12月10日に、木板製の赤い小屋型覆いを取りつけた。

ここで外して不要になった外付けコンセントは、工房部の外壁に取り付けた。

11月13日【工房部炉台】

工房部の薪ストーブ設置のための炉台は、玄関アプローチなどに使ったリバーストーンの余りで玉砂利あらわしとする。

覆い壁はレンガを使って作りはじめる。正寸のレンガを積み、左右両端は半かけ分の隙間があき、モルタルで固まった後に半かけ部材を補った。より安全な構造をと思って、内壁と覆いの間に約10ミリの隙間を空けた。

炉台と覆い壁は19日に完成する。

この年、22日に初雪が降った。

12月10日【工房部の断熱】

工房部の内壁を、グラスウールの断熱材を入れつつ、その上に5ミリ厚のベニヤ板を張り、さらに、購入した12ミリの針葉樹構造用合板を張り巡らす。ベニヤ板の上に針葉樹構造用合板を重ねるといのはちょっとやり過ぎの感はあったが、断熱効果がより高まるのではと考えてのことだった。針葉樹構造用合板はホームセンターKから1枚約1,000円で計30枚を購入した。

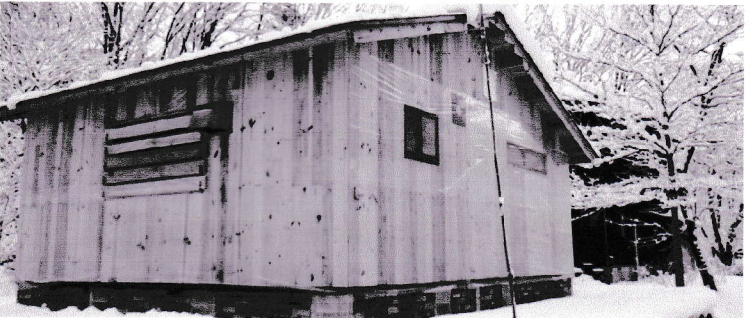
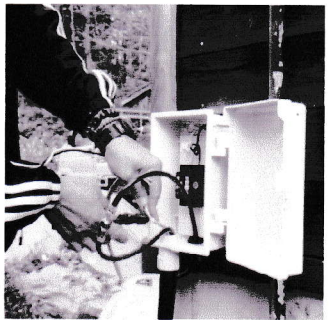
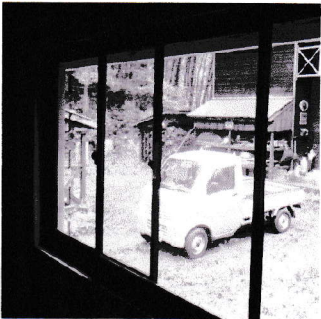
工房部の内壁は24日にすべてを張り終える。

工房部にはまだ暖はなく、主屋の部屋で使っている温風ヒーターを置くものの暖房能力が低く、長い時間の作業には耐えられるものではなかった。

12月19日【ポリシート覆い】

塗装前の外壁が、雪(が解けた水)が染みこんで傷まないように、ヒュッテ全体に農業用ポリシートを巻いてこの年の作業を終了とした。

まだできぬ玄関ドアの設置位置には骨董屋から貰っていた突き板(天然木化粧合板)の引き戸を打ちつけてこの年の作業を終了とした。



●
2012年

4月15日【鋼材箱処理】

雪が解けてきて地面が顔を出し、この年はじめて、野外で本格的に働く。

冬の間カモシカ小屋(車庫)に保管しておいた未処理の鋼材箱からの板取り作業をはじめ。釘を抜き、幅を揃え、ヒュッテ部の腰板材をストックする。

5月8日【煙突立ち上げ基礎】

煙突の立ち上げを支えるための基礎を作りはじめる。地面を約15センチ掘り下げ、グリ石を敷き詰め、捨てコンを打つ。その上にモルタルで石とレンガで意匠をこらして作る。13日に終了する。

この作業は、煙突の壁面からの距離や位置取りについても勘案し、かなりの計算を要した。

6月3日【意匠性スリット】

外壁の板と板の合わせ隙間を埋めるべく、45ミリ幅、15ミリ厚のスリット材を打ち付けはじめ、26日に終了する。

アメリカの古い作業小屋などに見られるスリット模様は簡素にして美しいと思う。一例、ターシャ・テューダー(Tasha Tudor 1914-2008)の納屋もそうであった。

6月9日【玄関口庇】

一度はあきらめていた玄関口の庇^{ひさし}をやはり作りたいと思い直し、地区のS大工に相談する。外壁ができてからの庇作りは予想通りむずかしく、そのむずかしい作業をていねいに教えてもらって挑戦した。

その方法はまず、外壁の柱が通る場所に角材幅の3寸四方の穴を3箇所開け、そこに突き出し材を差し入れて羽子板ボルトで固定し、そこにヨコ材(桁)と垂木を渡すというものだった。大工に教えるを請う前に自分なりの方法を考えていたのだが、その大胆な発想には驚かされた。

そこで自分なりに工夫し、外壁の角材の木口分の穴は、ジグソーで、しかも刃をちょうどよい長さに折って切り落とすという方法をとった。

構造材を組んだあとはルーフィングを行い、あり合わせの波トタンを張った。そして、手持ちの塗料で色を調整し、塗って仕上げた。

6月26日【外壁塗装】

インターネットで購入した塗料キシラデコールのタンネングリーン色(16リットル)を外壁に塗りはじめる。塗料はネットが断然安く、26,000円ほどだった。ホームセンター価格の2~3割安という印象である。それにしてもキシラデコールは高価だ。

まず水切りに近い部分をていねいに塗り、それから全体に広げ、すべてを2回塗りして7月11日に終える。

7月16日【ヒュッテ部内装】

ヒュッテ部の内装に取りかかる。

まず手はじめに、防火用にと、ストーブ設置位置の天井および壁面にケイカル板を張る。

このケイカル板のほとんどは建築現場から貰ってストックしていた端材だが、それだけでは少し間に合わず、ホームセンターからサブロク判1枚だけ、530円で購入して作業を済ます。

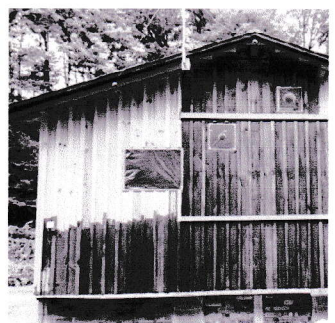
その他の壁面については防火効果の高いプラスターボード(石膏ボード)、その上に5ミリ厚ベニヤを張ることを考えた。まずはプラスターボードを10枚購入して5枚ほど張りつけてはみたが、どうも弱々しくもろく感じられ(その壁面には釘も打てやしない!)、張ったものをすべて撤去し、ほしい人にもらってもらった。安価に仕上げて構造に問題が残るよりは、構造上より強固な方法を選択した。それで針葉樹構造用合板を内壁のすべてに張りめぐらし、31日に終了する。

合板の内側には、すべて発泡スチロール製の断熱材を入れた。幅の規格が違っていたので、いちいち胴付ノコで切って入れ込んだ。

この膨大な断熱材は、近くの施設の解体に際して出たもので厚さは60ミリである。解体業者にすれば処理に費用のかかる厄介者、こちらにすれば有用で上質な断熱材がタダで手に入るという、願ってもないこと。こういうやりとりは気持ちがいい。

8月1日【ヒュッテ部炉台】

ヒュッテ部の薪ストーブ設置のための炉台を南



陽市の実家から持ち帰った凝灰岩(約 45 センチ幅、90 センチ長、10 センチ厚)とレンガとで作る。凝灰岩は加工がしやすく、ディスクグラインダーの石工用アタッチメントで自由に成形することができた。覆い壁はレンガで作り、ストーブ設置のための下準備は8日に終了する。

8月19日【切窓】

ヒュッテ部と風除室の壁に片側開閉式のガラスの切窓を入れたいと思い、作りはじめる。冬場の室温調整や、夏場の、風の通り道のためである。

ガラス板は地区の公民館から廃品として出た食器棚の引き戸を利用し、22日に取り付けをする。ダイヤモンドカッターでガラスを切る感覚を久しぶりに思い出した。

8月27日【風除室天井】

風除室の壁および天井に発泡スチロール製断熱材を入れ、相欠きした板材で天井を張りはじめ、9月8日に終了する。

天井を張ってゆくのはむずかしいことではないが、板が火打ち梁にさしかかると、どんな風に欠き取っておさめたらよいか、その割り出しが少々むずかかった。

8月29日【主屋メンテナンス】【主屋外壁塗装】

「築20年でメンテナンス費用100万円」とはよく言ったもので、まったくその通りだった。換気構造の転換と水回りの再施工が必要となった。施工業者は地区のS大工もチームに加わるY建設とE配管をお願いした。

周囲には工事のために足場が張り巡らされ(設置費用だけで35万円で、工事費の大きな部分を占めていた)、足場がかかっているうちにと、主屋の外壁の塗装を、約10年ぶりに自ら行う。この塗装は天候のよい土曜日曜を利用しての細切れの時間で、しかも窓等へのマスキング養生を施しつつの作業の連続で、晩秋まで続いた。

ヒュッテの完成予定は建築当初から2012年秋をめざしていたが、これで大幅にずれてしまう。

9月17日【ヒュッテ部腰板】

この日よりヒュッテに腰板を張る作業をはじめ、10月10日に終了する。

腰板材は相欠きしたもので、左右で約5ミリの差をつけて目地あらわしとした。腰板が周囲に張られると部屋がぐっと引き締まるのを感じる。

10月10日【クリ材ベンチ】

かつて古民家の土台に使われていたと思われるクリ材で、ヒュッテ内に設置するベンチを作りはじめ、29日に完成する。

フォルムといい機能といい造作物として申し分ないものとなった。これは、腰かけや物置台として利用できるだろう。クリの地肌は美しい。

11月4日【塗装下地】【塗装のやり直し】

ヒュッテ部内壁の塗装に入る。本当は漆喰塗りを実施したかったのだが材料費があまりに高くなり、結局は水性塗料による漆喰風塗装とする。

腰板部分を養生し、塗装の下地作りとしての目止めの作業に入る。この作業はまったくたいへんなものであった。下地剤には、プラスターボード等に使われる、安価な、粉パテ(メーコーコナパテV、2キロで950円)を使った。水で溶いて 鏝(へら)で伸ばして均一になるようにし、パテが大方乾いたあとに、サンダーをかけて平滑にした。

平滑にしなければ、この粉パテは、鏝の使いようで様々な表情の壁面ができることを知る。

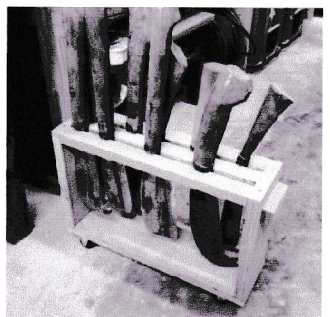
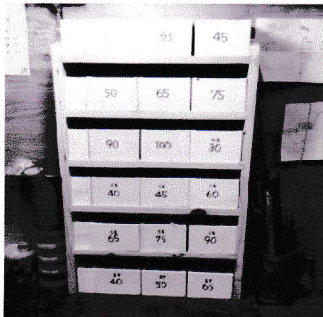
内壁の塗装色は念入りに検討し、カンペハピオ社製のカントリーライフカラーシリーズからグレーホワイトを選んで2リットル缶を購入して塗ってみた。ところが乾燥した色がイメージと違ってがっかりし、より白が強いスノーホワイトを再度購入して塗り直す事態となる。長い年月に日常的に触れることを考えると、3千円何がしかの金額はもったいなくも無駄にしてよいものと思った。

マスキング、目地の整え、表面のサンダーがけと本塗装3回は思いのほか難儀する作業の連続で、塗装が専門になり得ることを実感する。

12月2日【工房部収納棚】

工房部の設備の充実をはかる。

釘収納棚、鉈なたと玄能、木槌、金槌の収納に心を砕いた。鉈は、ネットオークションで、古びてしかも



安価なものを意図的に蒐集し、いずれも研いで使えるようにした。昔の鍛造品は強くて美しい。

主室内の作業部屋で使用していた工具等の収納棚を運び入れて工房としての体裁を整える。主室内の作業部屋には小さな作業台とボール盤などの電動工具を載せていたテーブルがあったがこのふたつとも工具載せ台として再利用した。

12月23日【山の写真】

ヒュッテ部の壁面構成として最も重視したことのひとつは、山にまつわる写真の掲示だった。3枚の額(1枚が68×28センチ)を手作りし、ひとつの額にA5サイズの4枚ずつの写真をおさめたが、写真はいずれも色を抜いてグレースケールあらわしとした。写真は色を抜いた方がより彩りあるものとなるという思いが筆者にはあった。

山の写真はヒュッテの雰囲気醸すと同時に、今は巣立った子どもたちがまだ小さかったころのものも含めて家族の山行きの歴史の意味合いも込めた。

写真は、地理的に南から尾瀬ヶ原(群馬)、一切経山(吾妻連峰。福島)、弥兵衛平(吾妻連峰、山形)、大朝日岳(朝日連峰。山形)、鳥海山(山形)等、いずれも愛すべき山々である。のちの模様替えて、以東岳(朝日連峰。山形)と飯豊本山(飯豊連峰。福島、山形)を加えて既存に差し替えた。

12月31日【ソローの肖像】

ヘンリー=デイヴィッド=ソロー(Henry David Thoreau 1817-62)の肖像を飾る。ソローは、アメリカ合衆国マサチューセッツ州コンコードに生まれ、終生そこで暮らした博物詩人である。

ソローはウォールデン湖畔の森の中に自ら丸太小屋を建て、自給自足の生活を2年2ヶ月間送る。代表作の『ウォールデン・森の生活(WALDEN, OR LIFE IN THE WOODS)』(1854)はその生活の記録をまとめたものであり、その思想は後の詩人や作家、ナチュラリストに大きな影響を与えた。先にふれたターシャ=テューダーもしかり。

筆者の森行き、森住まい、森の生活はソローによって導かれたといって過言ではない。ソローの清澄な人生を思う。

1月1日【木製単板スキー】

知り合いの骨董屋からいただいていた木製単板スキーを薪ストーブわきの東壁面に飾る。

日本で木製単板スキーの製造が始まったのが1912(明治45、大正元)年、合板スキーの製造開始は30(昭和5)年とのことなので短く見積もっても85年以上を経たかなりの時代物と思われる。材はイタヤカエデ(板屋槭樹)だろうか。ストックはポールが竹で、輪は籐(ラタン)を皮でつなぎとめている。

時代物のスキーは、見るだけでうっとりする。素朴で美しい逸品と思う。

1月4日【ウォールシェルフ】

カーテン棒受けとそれに連結するウォールシェルフ(壁棚)を作る。

カーテンは、主屋に倣ってレールではなく丸木棒を吊った輪が滑る方法を取った。

ウォールシェルフには、のちに民芸品などを飾る。

1月6日【壁燭台】

壁燭台を2つ作って、設置する。

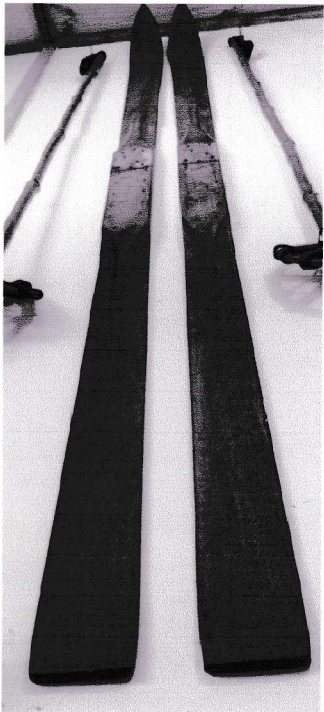
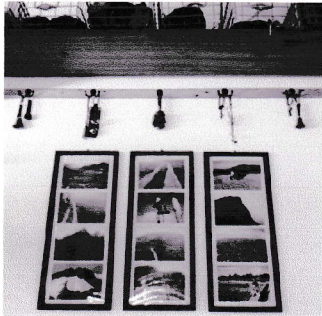
燭台受けの形状を工夫した。燭台本体は旅館の食事によく出てくる個土鍋を受ける鋳鉄コンロを利用したが、これは100円ショップで求めたものである。

紡織の古い糸巻きを知り合いの骨董屋と友人からそれぞれ貰っていたので、その上にもちょうどコンロが収まり、移動式の燭台も4つ作った。

2月4日【上がり框】

上がり^{かまち}框を作り始める。本当は床板張りのときにすべき作業だったものがここまでずれ込んでしまい、とてもむずかしい作業となった。難儀するだろうと思って、後回しにしてきたツケが回ってきた感じだった。ものづくりには常に順序というものがある。順序を無視したり侮ったりすると、あとでしっぺ返しがかかる。

15日に、苦勞して作り終える。



2月15日【ドアA】

工房部から風除室へと通ずるドア(A)を製作する。ホゾとホゾ穴を作ってしっかりと組み、接合部にコーススレッド90ミリを打ち込んで骨組をこさえた。片面(工房側)はベニヤ板、片面(風除室側)は桧板張りそれぞれ部屋の表情に合わせ、空洞にポリスチレンフォーム(青色スタイロフォーム25ミリ)を入れたフラッシュ構造とした。

廃材のガラスを切って、上部にはめ込んだ。

ドアノブは一番安価な1,780円のステンレス製空錠を取り付ける。

2月25日【古家具修理】【風除室灯り】

造作が一段落し、学校の解体で出た古家具の修復をする。欠損している引き出しの一つを新たに作り、底板が抜けていたものを新たに付け替えし、金具はすべて新調、塗装を新たに施してよみがえらせた。

風除室にセンサー付きLEDライトを取り付ける。シェード(傘)は、実家で使っていたレトロな乳白色のガラス製を使う。昔なつかしい電傘はヒュッテにとでも似合っていると思う。

翌26日、積雪は265センチを記録した。

2月26日【風除室塗装】

風除室の塗装を施す。室内同様、下地剤で目を埋め、研磨して平滑にし、その上に水性塗料スノーホワイト色を3回塗りした。

3月3日に終了する。

3月10日【ドアB】

風除室からヒュッテ間への、2枚目のドア(B)を製作する。前作同様に骨組みを作って、両面を桧板材(材料がなかったわけではないが、ザラ板が安価で出ていたのでそれを製材して使った)で覆い、中にポリスチレンフォーム30ミリを入れたフラッシュ構造とした。このポリスチレンフォームは、今は家を出た娘のベッドの下敷きとして使っていたものを転用した。このドアにも、先の工房部から風除室へのドア同様、ガラスを切ってはめ込んで窓とした。

ドアノブはネットオークションで落札した箱錠(開閉する装置が金属の箱に収まっている。ただし今回入手したものには錠が付属しておらず、錠の機

能を果たさない)を使った。落札価格は2,400円くらいだった。真鍮製の美しいものだが座金が欠品していて、羽子板ボルトの羽子板部分を切って自分でこしらえてみた。この座金は我ながら、グッドアイデアと思う。

3月14日【外灯(玄関灯)】

夜に玄関を照らせるよう、南壁面に昔風の外灯を取り付けるイメージがあった。シェードとそのサポート(支柱)はネット通販で1,600円という安さで取り寄せ、灯りはセンサー付きLEDライトを使った。この外灯のフォルムが美しい。

職場からの帰り、夕暮れどき、この灯りが迎えてくれるのはうれしいものだ。

3月20日【風除室壁面構成】

風除室の壁面構成をいしはじめる。実際の馬蹄(骨董屋Yから買ったもの)や真鍮製の馬飾り(100円ショップのもの。インド製)を壁に取り付け、愛用のスノーシューや学生時代にスケッチ旅行や山行きに使っていたアルミパイプの背負子式リュックを配置した。背負子式リュックは、今はもう見ることはなくなって、なつかしい。

壁に小割り材を渡し、フックをつけてトレッキングポールや作業着等を掛けられるようにした。

3月23日【丸テーブル修理】

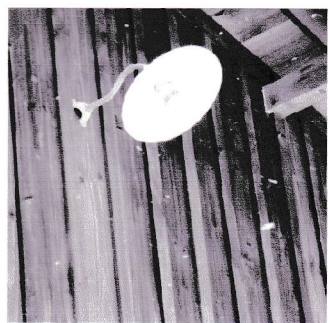
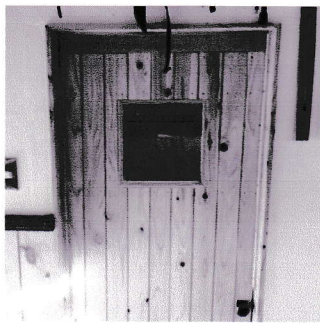
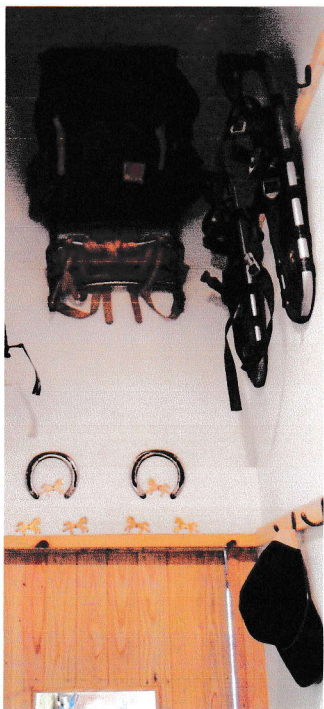
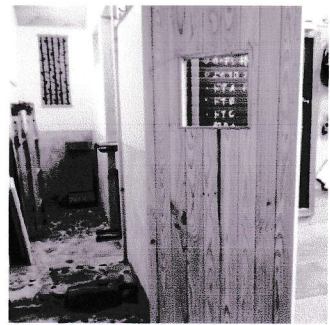
学校の解体にともなって出た丸テーブルの割れの入った天板を補強するため、20ミリ厚の板を継いで天板を取り付ける。

このテーブルには、客があった時にはコーヒーやワインが載せられるだろう。

3月24日【書架】【フクロウ】

6段ある書架が完成する。使った22ミリ厚の板は鋼材箱から取ったものである。仕口を“大入れ”とし、頑丈な作りとした。

さっそく愛蔵の書を並べた。蔵書のコンセプトを「山」「自然」「環境」「暮らし」とし、エッセー、思想書、山の地図、山歩き・野遊びのガイドブック、植物図鑑、自然や野の花にまつわる絵本、建築や暮らしの雑誌等で構成した。これで、思う存分読書が楽しめる。



書架に文庫本スペースが一段空いて、そこに蒐集したフクロウの民芸品を飾った。これらはメキシコやインドネシア、ペルーや日本などで作られたもので、素材も表現も様々で楽しい。

フクロウ(梟)は森の生態系のひとつの頂点。フクロウが住むことができる森というのは自然が豊穡であることの証明でもある。ここ笹籬の森にも夜にはフクロウの鳴き声が響く。この環境が続くことを願うばかりだ。

4月14日【風除室腰板回し】

風除室は腰板を回すのかどうか、全面を板張りにするのかどうか悩んだが、結局、傷防止を兼ねて腰板を張ることにする。

腰板はヒュッテ部同様、左右で約5ミリの差をつけて目地あらわしとした。

4月20日【アイアン脚テーブル】

病院の作業小屋解体時に出た美しいアイアン脚を使ったテーブルを作る。風除室の奥の位置で花を飾るための台とする。

4月24日【シードバンク】

書架同様22ミリ厚の板を使い、仕口を“大入れ”とし、7段のシードバンク(seed bank=種の銀行)の棚を作る。窓辺のデスクをはさんで、左の書架と対となるようにした。

筆者はジャン=ジオノ(Jean Giono 1895-1970)の『木を植えた人』(こぐま社)の主人公ブフィエにはなれずとも、種を拡げる人にはなりたかった。種は、希少種や造形的におもしろいものを蒐集してガラスの瓶に入れて飾るだけでも美しいのに、興味ある人に貰ってもらい、その人が種を蒔いて育てたら楽しい。

シードバンクを意識しはじめてから、特に晩秋の枯れ野に、種をさがして歩く楽しさが加わった。

種の収納のためのガラス瓶は薬瓶が美しいと思い、100円ショップのSIに特別に注文し入手した。ただしこの商品は現在では廃版になっており、ネットで同様のものを探せば1ヶが400円となっていた。コーヒーなどを入れるアルミのフタ付きガラス瓶(キャニスター)も美しく思えて集めた。また、病院の解体前にもらっていた本格的な未使用の薬瓶も

相当数含まれているが、医療用だけにこれを買うとなるととんでもない金額となる。

種は現在、木本が30種、草本26種であり、今後その数はさらに増えていくだろう。

5月3日【民芸品】

風除室とヒュッテ内部に民芸品を飾った。

風除室窓辺のキツネは、秋田は角館のイタヤ細工である。イタヤカエデ(板屋槭樹)の枝の丸太を鉋で3タテ6等分したもので、それぞれに刻みを入れてキツネにしている。割ったものなので、位置よく合わせればまた元の丸太に戻るという趣向である。はっきりとは思い出せないが、就職してすぐのころの旅行で買ったものだったか。

室内北側の壁にあるキツネは約40年近く前に、北海道旭川で求めたもの。材質はオンコ(エンジュ=槐)であり、旭川民芸の逸品のひとつ。実はこれは、キツネの立派な尾の部分が刃になっているペーパーナイフであり、クラフトの力を備えている。

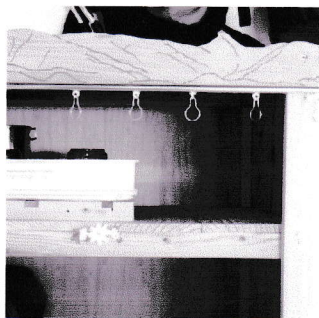
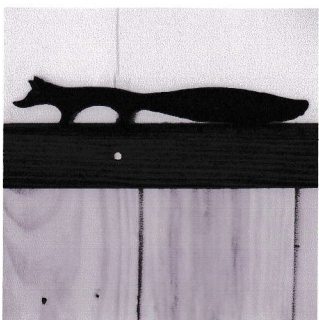
室内北側のウォールシェルフに並んでいる民芸品4点は、北海道は網走のもの。1点は網走刑務所内で作られたニポポ人形、他3点は筆者が学生時分の貧乏旅行のときに居候をしていた民芸品店(〇民芸店;網走市新町)のご主人作。いずれもアイヌと北方原住民族に題材を取っており、「チバシリカムイ」「流水小僧」「パシカ」と命名されている。

筆者の、北方への憧れは今もって強い。

ロシアの探検家アルセーニエフ(1872-1930)が著した『デルスウ・ウザーラ 沿海州探検行』(長谷川四郎訳、平凡社 1965)は筆者の愛読書のひとつである。のちに、『キネマ旬報』の「デルス・ウザーラ」特集をネットオークションで入手し、その中にあった映画監督の黒澤明がこの作品を映画化する際に描いたデルスウの絵コンテを額に入れて飾った。

5月4日【ロッカー】

収納家具として想定していたもうひとつのものは、押入れ代わり、食器棚代わりとなるべくロッカーだった。これは前2作の家具(棚)とは違い幅があり奥行きが広く、まず骨格を作ってから針葉樹合板や空板を使って張り上げる方法をとった。シユラフやマット、毛布などの寝具とコッヘルやシェラカップ、



コンロなどの調理器具をひとところに一緒に収めるのはどうかと思ったが、これ以上家具を増やしたくはなく、妥協した。

当初この家具の開閉は扉を想定していたが、扉は思いのほか場所を取ってしまうことが分かり、結局、レールとフックを用いたカーテン引きとした。

ロッカー最上部の板には市中より四季折々に見ている奥羽山脈の南端、東の稜線=栗子山の山容をハンダゴテで焼いて描いた。愛すべきルーザ (lusa)、万世町梓山筑籬はその裾野にある。

6月3日【デスク】

5月半ばから木取りをはじめていたデスク (h730ミリ、w1130ミリ、d505ミリ) が完成する。脚には外 2 面は垂直に、内 2 面には傾斜をつけてスタイリッシュにした。正面にふたつの引き出しをつけたが、前面の板は捨てられていた跳び箱のナラ材である。

このデスクのフォルムは、かつて息子と娘の学習用にと作ったものとほぼ同じものである。この、シンプルかつ実用を備えたフォルムは今も筆者を惹きつけてやまない。

デスクは、ひとつはものを読んだり書いたりするため、ひとつはここを利用する人の、思いを巡らせる什器として。

6月7日【小棚】

シードバンクの棚には適さない大きなガラス瓶ふたつ (山形大学工学部の廃品として出たもの。聞くとところによれば、希少金属の保存に使用されていたのだという) を収納したくて、ナラ材 25 ミリ厚の部材を使い、組をしっかりと行って小さくも頑丈な棚を作る。

6月7日【作業台】

少しずつ少しずつ完成の日を思って緊張する時間が過ぎてゆく。意識を切らさずに最後までやり遂げるといふ、継続意識の途切れが怖くなってきていた。何もできない、何もすることのない日は、掃除だけでもと思って工房の汚れやゴミを払った。これまでもそういう日が幾日もあった。

造作物の課題として最後の方まで引っ張ったのは玄関口のドアだった。それまでの 2 枚のドアの構造とは根本的にちがう、単板による組みのみで構

成されるもので、溝切り、相欠き、ホゾとホゾ穴の加工などの技術を要する、覚悟を決めて本腰を入れないととてもできない作業である。第一に、重量が他とは違って格段に重い。

前作 2 枚のドアの平面に歪みが生じていたことについては、できてからではあとの祭りであった。その原因のおおよそは、作業台そのものがあまりにちやちやだったことが考えられる。ビールケースを重ね、そこに 12 ミリ厚合板を一枚載せたただけの上で作業を続けてきたわけで、これで狂いが生じない方がよほど不自然である。それでまず、以後の家具製作などの作業も見越し、本格的な作業台を作ると決めた。

この日より木取りを始めた。脚は 3 寸角、天板は山大工学部から貰った 40 ミリ厚のもの (実験室の作業台だったのだろうか) を使用し、ホゾを組んでがっしりとした構造に仕上げた。引き出しも 2 つ付けた。この引き出しにはのちに、平ノミとヤスリを収納することとした。

工房は 12 畳になったとはいえ手狭なスペースに変わりはなく、作業台を定位置に置いておくことはせず、相当な重量ながらキャスターをつけて自在に移動できるようにした。

作業台は 23 日に完成を見る。

6月22日【カーテン】

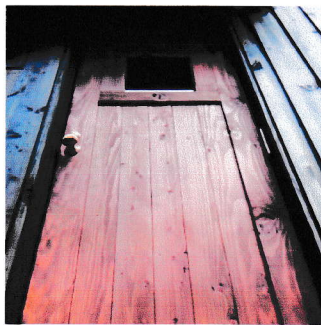
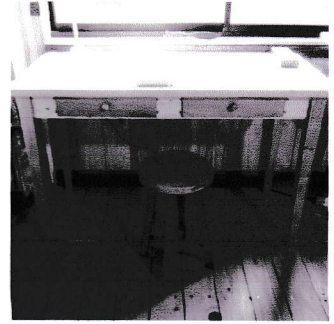
ヒュッテ部の西と北のふたつの窓とロッカーにカーテンを取りつける。筆者の誕生日となるこの日、リクエストに応じて妻が作って贈ってくれた。材料は子ども部屋の仕切りに使っていた布の再利用である。カーテン生地は綿素材で、無地にして色は生成りだが、使われるべき布地はこれだという思いがずっとあった。

ふたつの窓のカーテンの開け閉めはレールではなく、のちに径 19 ミリ鋼管 (電線管) をディスプレイフックが滑るものにした。当初はラミン丸棒 (木製) を使っていたが、棒を鋼管に替えたらカーテンの引きが格段に違ってきた。

カーテンが入り、部屋が引き締まった。

6月29日【ドアC】

この日より、玄関口のドア (C) の木取りをはじめ。ちょうど 20 年前の主屋の建築の際に余った材



料を保管していて、その一部をドアの枠材に充てた。34 ミリ厚 100 ミリ幅の、曲がりも振れもない征目のしっかりとしたベイマツ(米松。ダグラスファー)と思しき材は骨格材として使った。ドアの前2作同様に、上部のほぼ同じ位置に窓枠をつけ、廃品のガラスを切って入れた。窓枠の下は、18 ミリ厚の板材を相欠きして組み合わせた。

レトロな真鍮製箱錠は前作のドアノブ同様ネットオークションで求め(倉庫に眠っていた新品だそうで、今なら5万円ほどもするものを4,000円ぐらいで落札した。うれしかった)、取りつけたのが7月21日。彫り込んだり、刻みを入れて穴の径を調整したりと難儀な作業が続いた。

ドア全体に木材保護のためのステイン塗料を施し、玄関に取りつけたのが7月28日だった。取り付けには、病院の解体前に取っておいた頑丈なステンレス蝶番を3ヶ使用し、妻に支えてもらって固定し、作業を終了した。

7月8日【網戸】

S加工に頼んで、ヒュッテ部3箇所の窓に網戸を入れてもらう。南の窓は既製品なので既製の網戸だが、西窓と北窓はもう既に流通が停止している廃版品なので寸法に合わせて作ってもらった。請求は既製品も含め計13,500円だった。

これで夏、虫を避けつつ心地よい風を通すことができる。網戸が入ったことに感激を感じる。

8月1日【煙突設置】【支え梯子】

工房部とヒュッテ部に座る薪ストーブの煙突の設置を最後の最後に残した。最後に残したというのはこの煙突設置の作業こそは最も困難を極めると予想したからである。時間をかけて意識を高め、じっくりと向き合おうと思った。

薪ストーブで薪を焚けるようにするには適切な煙突の設置が必要で、それを業者に依頼すればだいたいそのストーブの値段に匹敵する施工費がかかることされる。それだけ難儀するのだが、それを自分で行おうとした。

ストーブの設置位置、ストーブからの煙突の立ち上がりの位置、それを考慮して直角に曲がって壁を突き抜ける穴が連動している必要がある。その穴がメガネ石であるわけで、ここに煙突が通らなけ

ればならない。つまり、メガネ石の位置がすでにストーブの位置をほぼ決定しているのである。

さらに、壁から出た煙突の、今度は立ち上がりの位置取りがむずかしい。煙突の先端(煙突トップ)は軒の下に置いてはならず(消防法と建築基準法に規制されている)、軒端の外を通り、高さは屋根の棟よりも上に出すことになっている。こうすることで強風の際の空気の逆流を防ぎ、ドラフト(上昇気流)の発生と吸い込みを容易にするのである。

煙突は普通、両脚の金具で固定することが多い。煙突を壁の外に出す場合、外に出た煙突は壁からの金具でタテ部材を何箇所かで固定し、軒(または壁)からの金具でヨコ部材を固めるが、この方法に筆者は以前から疑問を持っていた(主屋で最初に設置施工してもらったのがこの方法だった)。あちこちの煙突を見て歩くとこの方法の煙突は傾いていたり歪んだりしていることが多く、それは風や雪や地震などの自然から加わる力に抗し切れないからのようだった。

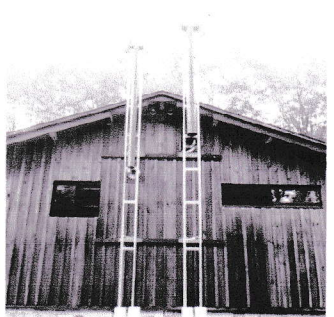
それで筆者は、2007年の主屋の煙突の設置そのままに、まず地表面から伸びる垂直な梯子を立て、梯子の左右の渡しに垂直管の最下部を落として上下を安定させ、さらに渡しからタテを何箇所かで固定するのが最も安定し確実な方法とした。よってそれを見越して、2012年5月にその梯子の立ち上げのための基礎を打っておいたのだった。

そこで適切な梯子があれば苦労はしないのだが、約6メートルの単梯子は1万円を優に超え、これを2本買いたいとはとうてい思えなかった。それで、梯子代わりを鋼材(下地材補強材 RC-65)とLアングル(L-59W)とで製作することにした。材料代とすれば、接続のためのボルトナットを含め、8,000円程度だったと思う。

梯子のピッチは、工房部から出る煙突のタテ位置とヒュッテ部から出る煙突のタテ位置の差(68センチ)として、6本ずつのヨコ材をLアングルで渡した。軒端からの適切な距離を割り出した上での梯子の接地位置の計算もあり、頭を使った。

ホームセンターM扱いの鋼材の最長は4メートルで、煙突トップのあるべき高さに若干足らず、立ち上げ基礎の上にフェンス基礎ブロック(180×180×450ミリ)を載せ、羽子板ボルトを付けて固定した。

この煙突設置工事は難儀したが、8月15日によ



うやくのことやり終える。

8月17日【山小屋の名】【看板】【竣工】【杼】

この山小屋の名「ルーザ・ヒュッテ」は、建築を本格的にはじめようとした2008年頃には固まっていたように思う。候補としては、「箆籬小舎」「箆籬の森山荘」などを挙げたが、山小屋を意味するドイツ語のヒュッテ(Hütte)ということばの響きがよく、まずこれを採用した。それからルーザだが、これは単に地名の箆籬をひっくり返して間を伸ばしたに過ぎないが、この語感についてはドイツの革命家、ローザ＝ルクセンブルグ(Rosa Luxemburg 1871-1919)から来ている。名は、若い日の筆者の、ローザやシモーヌ＝ヴェイユ(Simone Weil 1909-43)といった、時代と人生を重ねてピュアに生きた女性に惹かれもした、その情緒的な痕跡でもある。

横道に逸れるが、ヴェイユの箴言「美は常に約束するけれども、決して何ものをも与えようとしない」(『重力と恩寵』)は今に眩しい。

なお、『東北の避難小屋』(高橋信一著、随想舎2005)によれば、東北地方に数えられる山小屋150のうち、「ヒュッテ」と名のつくものは7つ、「山荘」が21、「小屋(小舎)」は105で圧倒的である。

命名とは不思議なもので、そうすることで空間がそれまでとは一種あるいはまったく異なったものに造形されるものである。宮澤賢治の“イーハトヴ”がその典型で、これによって岩手県そのものがファンタスティックにも見えてくる。岩手県がイーハトヴなら、箆籬はルーザである。ここはいわば筆者の小宇宙、理想郷と言える。

看板の文字の原版は、2010年の6月、職場に来ていたALT(外国語指導助手)に書いてもらったものである。その人、キム＝ステファンさん(Kim Stethen.スコットランド)はひらがなやカタカナを覚えてたてで、そういう人が筆文字で書いたらきつと味のあるものができあがるのではとってお願ひした。それをナラ材に彫った。

なお、彼女の滞在の2年間、筆者は機会をとらえて様々に話を聞いた。彼女は母国スコットランドの、イギリスからの独立を強く主張していたが、今年(2014年)9月の住民投票で独立派が敗北したのには大いに残念がっただろう。来日の折には我がヒュッテに立ち寄ってくれる約束をしたものだが、

はたしてどうだろう。

この看板を掲げた日、2013年8月17日をルーザ・ヒュッテの竣工とした。

*

玄関を入ってすぐの風除室左奥の壁のものは杼=シャトル(shuttle)、機織りのタテ糸の間を左右に行き来しヨコ糸を渡す部材である。福島県昭和村にあるからむし会館では杼1本を、四方をガラス張りにして物々しく展示していたものだが、筆者はそのときから杼の造形的な美しさに惹かれて蒐集するようになった。

掲品中、中ぐらいのもの2点は長野の軽井沢追分の骨董屋で旅行の際に購入したもの、他はネットオークションで入手したもの。最大級(全長63センチ、650グラム)のものは越後、細身の3点は九州からの出品だった。九州のものには染料の藍が付着していた。

この杼の展示はヒュッテの重要なモチーフのひとつとかなてから考えていた。最初はヒュッテ内部の北壁面左端に、次にシードバンクの隣(西壁面)にと飾る場所が移動した。というのは、杼は1本でさえ存在感を示すのに6本もの展示はあまりに主張が強すぎて周りのものを殺してしまうのではないかと危惧したからである。結局、何も邪魔せずに安堵できる場所として、風除室の奥に落ち着いた。

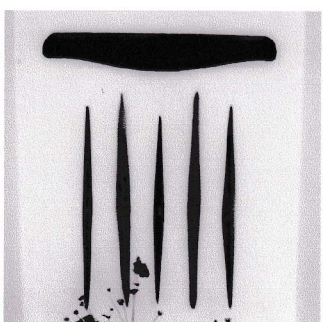
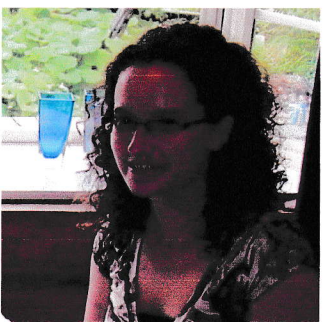
なお、もともとここに飾っていたキツツキをモチーフにした手ぬぐいタペストリーはヒュッテ内の北壁面に移し、西壁面には、実際のオオイヌワシ(大犬鷲)の風切り羽のパウチ加工のカラーコピー(鳥海山麓、酒田市八幡の環境省猛禽類保護センターから頂戴したもの)を2枚飾った。

またこの日に、以前に100円ショップから求めていたニワトリの鋳物製の呼び鈴を玄関口につけた。重厚な感じが気に入っている。

8月19日【ドアベル】

玄関のドアに、娘の部屋のドアのドアベルをはずして取りつける。カウベルが3つ付くもので、確か子どもが小さかったころに蔵王温泉スキー場に行った帰りに買ったものだと思う。

ドアの開閉のたびに高原にたわむれる牛が鳴らすような乾いた音が響く。



8月20日【平清水焼】【古成島焼】

骨董屋 Y で求めた平清水焼の大型を風除室テーブルの上に置く。その上に花瓶を置き、四季折々の花などを飾ることにする。そのテーブルの下には、炭を詰めた古成島焼を置く。この古成島は、所望して知人から譲り受けたものである。

このふたつの郷土の焼き物は美しい。

8月24日【はじめての来客、宿泊者】

家人以外のはじめての訪問者が千葉よりおいでになって旧交をあたためた。

翌25日には、はじめての宿泊者が3名、山形よりおいでになった。明るいつまべに林の広場で記念の酒宴となった。

8月30日【絵】

竣工記念ということで、友人から自作のヒノキのスケッチを贈られ、ありがたく頂戴する。特別にナラ材で額を作り、切窓の上に飾った。

11月2日【果実酒棚】【ナツハゼ酒】

近隣でナツハゼ(夏櫨)の実を大量に見つけ、これはもう果実酒にするしかないと思い、専用の瓶に詰めて35度の焼酎を注ぐ。

当初はシードバンクの最下部に並べる予定にしていたが、棚は蒐集した種の瓶でいっぱいになりそうで、新たな棚を作る必要を感じた。それで、ヒュッテ出口右に専用の棚を作って収納することにした。

その後、サンシュユ(山茱萸)、サルトリイバラ(猿捕茨)、キハダ(黄膚)の果実酒を収めた。ここには来年の夏以降さらに多くの果実酒が並ぶことだろう。

初冬に郊外で、鈴なりのキハダの実を見つけて興奮した。このキハダの実はいヌ語でシケレペと言ひ、筆者が思いを寄せるアイヌの習俗(食事や祭事)では欠かせないものだったという。珍重されたのは実ばかりではなく、キハダの名の由来でもある黄色い内皮は現代でも有用な胃薬の材料として広く通用している。

11月3日【バックパック】

9月に所用で仙台に行った折、山用品の店

でマウンテンダックス(略称ダックス)の40リットルのバックパックを買って帰る。さらに10月下旬にインターネットオークションで、同じメーカーの35リットルのものが手に入る。山行きがいくら山小屋利用にしても今までの容量(30リットル×2)では窮屈さを感じていたのでちょうどよいものが手に入った。今後、行動によって適切な使い分けもできるだろう。

ディスプレイも兼ねて、南壁面に掛けた。

11月24日【音楽】

ヒュッテに音楽が流れたらどうだろうとは常に思っていた。それで、ヒュッテのイメージを壊すことなく小さなスピーカーをデスクの奥に控えめに付けることにした。

音楽は楽しい。筆者は特に、バッハやチャイコフスキー、ドボルザークが好きで、読書やもの書きの最中もこれらの音楽を流していることが多い。

音源はパソコンとした。パソコンにはパロックおよびクラシックをはじめ、ケルトやトラディショナル、ポップス等の大量のCD音源を取り込んでいる。

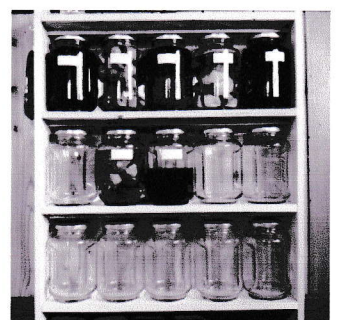
12月11日【薪箱車】

ストーブが入れば、そこには薪を置く場所が必要になる。当初は台車のようなものを作り、その上に果樹採集コンテナを置いたのだったが容量があまりに小さく、かつデザイン的な美しさに満足してはいなかった。それで、主屋のように薪箱を置いて箱車で薪を運んで積もうか、それとも箱車だけにしようかという迷う。いかに機能的で美しいか、そういうフォルムを追求した結果、結局は箱車のみとした。

箱車の、板の合わせは相欠きで処理した。移動が楽なように、斜めにせり出た角材の上に丸棒を渡して、握って押すことができるようにした。

12月23日【『住む。』】

積年の思いを形にしたこのルーザ、ヒュッテを広く紹介したいという思いはあった。それで、家や暮らしを見つめる日本で最も良質な雑誌のひとつであ



る『住む。』(編集;編集座、発行;泰文館、発売;農山漁村文化協会)に紹介文を送り、それが採用されて掲載される。

ルーザ、ヒュッテが紹介された記念すべき『住む。48号』が編集部より送られてくる。

●
2014年

1月9日【モバイルパソコン】

探し求めていたモバイルパソコン(中古)がリサイクルショップ H に入っていて即決する。というのは年末から年始を買い替えの時期ととらえ、ほぼ毎日のように H に寄っては品物を探していたのだった。実は、これはどうだろうと検討している間に次の日にはなくなっていたということが3度もあって、適当なものが入荷したらすぐに買おうと思っていたのだ。

モバイルパソコンは台湾の ASUS 製で、12,000 円を出ていた。オフィスは入っておらず、基本ソフトは“XP”。オフィスは自分でかつて購入していたものが使えることを確認し、インターネットは意図して接続しないので、基本ソフトは“7”への切り替えは必要ないと判断した。

設定には情報システム会社 D の K さんにお世話になった。

1月28日【薪箱車II】

先の薪箱車に付属する形で、焚きつけ用薪をいれる薪箱車IIを作る。

夏場は箱車I(大)に収まるように、入れ子式にした。

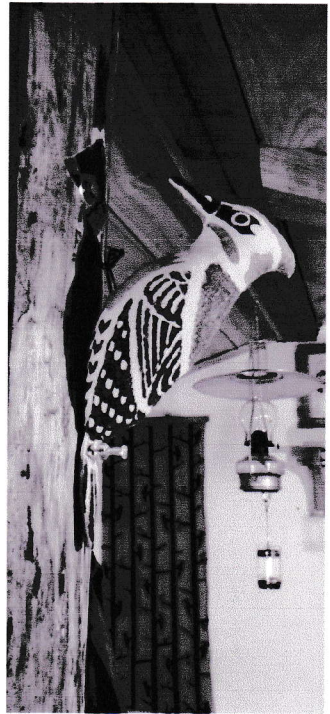
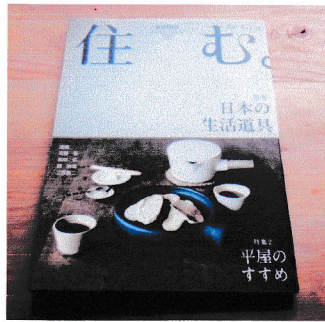
3月23日【木製単板スキーI】【大鋸】

知人が遠くに引っ越しをするというのでその手伝いに行った際、「昭和17年」と刻印がある旧制山形中学の木製単板スキーをいただいた。それにはバックル金具がついていて、それははずしてヒュッテ内の先に飾ったものに取り付け、この単板スキーは外壁南面左に飾った。

骨董屋 Y より購入した大鋸^{おが}を工房部内壁東面上部に飾った。長い間憧れていた品で、昔人の鋸を持って引く姿が偲ばれる。

4月25日【手染めぬいぐるみアオゲラ】

飛騨高山の手仕事「版画手染めぬいぐるみ鳥、アオゲラ」が届く。もう30数年も前に知った鳥の民芸品だが、ふとして雑誌で見かけ、なつかしくなって注文をした。



つら
面あらわしの柱に取り付け、アオゲラ(緑啄木鳥)が木をつついてはリアルである。アオゲラは家の壁をつついて穴を開ける憎きヤツだが、隣人にはちがいない。

9月17日【額縁の差し替え】

壁面の、山の写真の額縁を作りかえる。先に作ったものはマツ材だったが、冬場の室内の乾燥に耐えられずに、節のある箇所が歪んでしまってもないものになってしまっていた。新しいものはナラ材とした。ナラ材は堅牢で、これで歪みは解消されると思う。

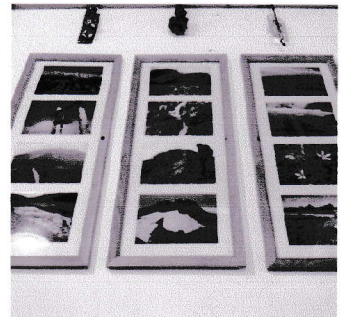
順次、ソローの肖像写真や黒澤明の絵コンテのデルス・ウザーラの額も差し替えた。

なお、このナラ材は捨てられた跳び箱を解体したもので、今後様々に使われるだろう。

10月26日【ランプ】

もう20数年前に小樽のK硝子から購入したランプだったが、ホヤを割ってしまってそのまま主屋に吊るしていたのだが、これをヒュッテに飾らないのはもったいないと思い、当社に問い合わせ取り寄せたものである。

いつぞやの旅路の青森は黒石の青荷温泉や今年の晩秋に行った福島は浄土平の吾妻小舎に灯っていた素朴なランプの風景がよみがえる。ランプは美しい。



参考図書

『木造住宅 建築工事の進め方』
監修;岸田林太郎 執筆;山室滋
発行;市ヶ谷出版社 1981

『建築構造』
著者;田口武一、富塚信司、他
発行;実教出版 1982

『カントリー・ファニチュア』
著者;藤門 弘
発行;山と溪谷社 1982

『ハウ・トゥ・カントリーライフ』
著者;遠藤ケイ
発行;毎日新聞社1991

『木造住宅【私家版】仕様書 架構編』
著者;松井郁夫、小林一元、宮越喜彦
発行;建築知識 1998

『廃材王国』
著者;長谷川 豊
発行;淡交社 1999

『近くの山の木で家をつくる運動 宣言』
執筆;小池一三(代表)
発行;NPO 法人 緑の列島ネットワーク 2000

『セルフビルド 家を作る自由』
編者;蔵前仁一 著者;矢津田義則、渡邊義孝
発行;旅行人 2007

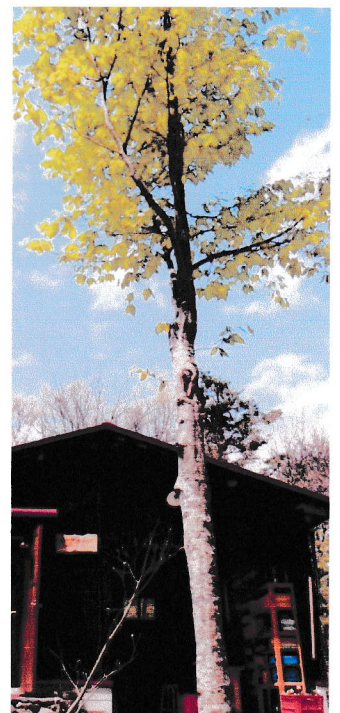
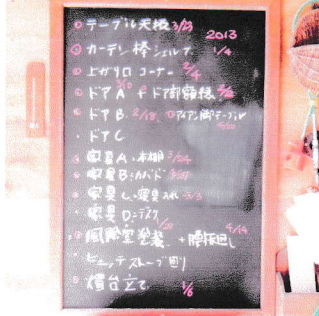
『自分でわが家を作る本。』
著者;氏家誠悟
発行;山と溪谷社 2008

ルーザ・ヒュッテの建築にあたり、上記の図書を参考にさせていただいた。

筆頭にあげた『木造住宅 建築工事の進め方』は常に手元にあったもので、一般住宅建

築の大工の教本とも言うべきテキストとして大いに活用させていただいた。手仕事はまだ息づいていた時代の大工の仕事ぶりが顕著で、とても魅力的な内容だった。たぶん大方の大工はこのころのことをなつかしんでいることだろう。

掲出した各図書から、木材を使って家屋や什器を自分で作る喜びを学ばせていただいた。著者や編者に敬意を表し、深く感謝申し上げます。



ルーザ・ヒュッテ案内

【アクセス】

駅基点で JR 米沢駅から国道 13 号線で南東方向約 10 キロ。障害者施設・栄光園を通り、笹籬橋を抜け、T 字路を右折してすぐ。バス利用なら、米沢駅バスプールから市民バス万世線で福祉の里入口下車、徒歩約 30 分。

北緯 37 度 53 分、東経 140 度 13 分。標高 352 メートル

【竣工】

2013 年 8 月 17 日

【構造】

木造軸組工法平屋建て、外装桧板張、床・腰板・天井桧板張、カラー鋼板葺き

【建坪】

10.5 坪 (ヒュッテ部 6 坪=12畳、工房部 4.5 坪=9 畳)

【利用期】

通年開放

【収容人員】

宿泊時;4 人 休憩時;8 人

【設備】

書架、シードバンク、デスク、テーブル、ベンチ、薪ストーブ等

【備品】

毛布、マット、炊事台、コンロ、コッヘル、シェラカップ、どうらん、掃除用具等

【水場】

管理棟 (外)

【トイレ】

管理棟

【利用料】

無料

【管理人】

本間哲朗

山形県米沢市万世町梓山笹籬 5519-1
〒992-1122/TEL0238-28-3982

* 利用の際は、事前に連絡をお願いします。

あとがき

辻まこと(1913-75)に、『画文集 山の声』(東京新聞出版局刊 1971)があります。あるとき、そのあとがきに触れて心震え、感動のあまり筆者は脱力してしまったものでした。ことばから立ち上がる匂いと絵…、それは見事なほどに美として結晶していたのです。

それですいぶん辻という人物が気になってさまざまに調べ、その調べの中で分かった辻にゆかりのある書店、東京は御茶ノ水駅前の茗溪堂にも行ったものです。ただし、この茗溪堂は残念ながら、2011年7月をもって店じまいをしたそう。

この『山の声』のあとがきの一部を引用して、「ルーザ・ヒュッテ ノオト」を終えようと思います。筆者にとっては、この美しい世界のためにヒュッテは作られたとも思っていますので。

炉辺というのは不思議なものだ。炉を囲んで焰を見ている夜は、たとえ沈黙が一晩中続いたとしても、人々はけっして退屈もしないし気詰まりなおもいもしないのだ。相槌を打っても打たなくてもいいのだ。語り手は半ば焰を聴手とし、人々は燃えうつり消える熱と光を濾してあるいは遠くあるいは近く、そこから生まれてくる話を聴くのだから。

2014年11月28日
(笹籬移住 21 周年)

ルーザ・ヒュッテ ノート
lusa hutte note

2014年 12月 22日 発行

著者 本間哲朗

発行 ルーザ・ヒュッテ

山形県米沢市万世町梓山笹籬 5519-1

〒992-1122 ☎0238-28-3982